合織糸・合織混紡糸

田村紡績株式会社

社長 田　村　正　衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 四日市6－2156(代表)
郵便番号　512

ミュンヘンへの道

いよいよオリンピックは組合せ抽せんもおわり、まさに秒読みの段階に入ってきた。

ミュンヘンを目指し、36年ぶりのオリンピックをめざしてきたここ数年の日本ハンドボール界の夢が一応は実現することになる。

とにもかくにも、人数その他の難問はあるが、夢はまがりなりにも実現したのである。

ここにきて、何のかんのいったところではじまらない。与えられた条件の中でベストをつくさざるを得ない。

過去四度、当ってはくだけてきたベスト8の壁は今回もユーゴー、ハンガリーの両国をたおさないことには実現しない。両国とも過去の実績からいって十分に可能性のあるチームだ。抽せんは願ってもない組み合せと云えよう。

この上は選手団諸君を全国のハンドボールファンの応援で、心おきなく戦い、ハンドボール界の宿願であったベスト8入りを果してもらうことしか道はない。最大限の努力をそれぞれの持ち場で払わねばなるまい。

ベストエイト入りを果せば、そこから先の見通しは開いてこよう。とにかく、予選リーグで3勝すること、これが最大の目標となろう。

ここでもう一度、ハンドボール界にとって、オリンピックとは何なのかを考えておく必要があろう。既に何度も触れたとおり、ハンドボール界にとって、オリンピック出場もしくは、上位入賞がそれ自身で、目的ではなかった筈である。それでは、一体何が目的なのか。それは、それぞれの立場、またそれぞれの考え方によって、異ってこよう。しかしながら、各人が意識しているかいないかは別問題として、オリンピック自体がそれだけで目的ではない筈である。あるいは普及のために有効な手段たりうると考えている人、あるいは今後の世界最上位への一ステップと考えている人、人それぞれ自己の頭のなかで描いているハンドボールの理想を達成するための一つの大きな導程にオリンピックを考えていることと思う。確かにオリンピック上位に入賞することで、それらは大きく一歩を踏み出すことになろう。

将来のハンドボール界のためにも最低ベストエイト入り、あわよくばメダルのおみやげを期待したいものである。(藤本)

時評

ダンケルセン・シリーズの最終戦(4月8日、大阪、対全日本)は、国内で行われた国際試合にはめずらしいラフ・ファイトとなり、しかもハーフタイム、終了後と2回にわたってスパヌス・ダンケルセンヘッドコーチが審判員を批難、後あじをいっそう悪いものにした。

同ヘッドコーチは記者団に対し「ルール解釈は西ドイツとまったく同じだが、全日本が反則を犯してもとらないのに、われわれの選手にはとるケースが多すぎた」と語り興奮気味だった。

日本を訪れたヨーロッパチームで日本の審判について、はっきりとクレームをつけたのは初めてといってよい。

もちろん、当日の両審判員は信念をもって判定をくだしたのであり、会場の観衆や、テレビでこの一戦を観たファンも「日本偏重とは思わない」というのだが、ここらが国際試合の難しさである。

ところで審判員は判定解釈だけが正しければいいものなのだろうか。このゲームがもし公式国際試合であったら大きなトラブルを招いたかもしれないとする人もいる。筆者が問題にしたいのはその点だ。

ジャッジに対するダンケルセンの抗議は筋違いとしても、試合の運行がとげとげしく荒っぽいものになってしまったのは、これは誰がなんといっても審判の責任である。なぜなら、フェアに試合を進ませるため〝絶対の権限〟を審判員は誰にためらうことなく行使できるからだ。

乱暴なプレーが繰り返されながら反則退場者一人というのはいかにもナマぬるいし、ダンケルセン選手が判定に挑発的な態度を露骨に示したにもかかわらず言葉の不自由さからか厳然たる措置をとらなかったのも肯けない。

ヨーロッパ通の人たちは「本場では乱闘寸前の試合もある」といい、村田全日本ヘッドコーチも「この程度のラフプレーはしじゅうだ」と気にしていないのだが、そうした傾向が正しいものでないことは本誌前号のこの欄ではっきりしている。つまらぬ面だけヨーロッパ流にならず、まっさきに見習うべきは、粗暴なプレーの流行を自分たちの責任と反省、レフェリングの高度化に精進している各国審判団の姿であろう。ハンドボールとプロレスは反則のやり得だなどという揶揄はプレイヤーの恥ではなく審判員の恥なのだ(X)

「ハンドボール」

5月号(第97号)目次

【表紙写真】 肩を並べる日独の主力選手―右から木野、ムンク、近森。ダンケルセン最終戦後の交歓で木野、ムンク両選手は相手チームのユニホームを着ている(4月8日・大阪市中央体育館で。撮影・光島磯雄)

日本の相手国（予選リーグ）決まる

～ミュンヘンオリンピック組合せ～

ユーゴ、ハンガリー、アメリカ

国際ハンドボール連盟（IHF）とミュンヘンオリンピック組織委員会は4月22日ミュンヘンのグロッサーピアターザール・スポーツハウスでミュンヘンオリンピックハンドボール競技の予選リーグ組み合せ抽せんを行った。その結果日本はユーゴスラビア、ハンガリー、アメリカとともにD組となった。各組2位までが準決勝リーグへ、各組3位が9～12位決定トーナメントへ、各組4位が13～16位決定トーナメントへ進む。（ ）内は一九七〇年の世界選手権における順位。

◇A組　デンマーク(4位)、スウェーデン(6位)、ソビエト(10位)、ポーランド。
◇B組　東ドイツ(2位)、チェコスロバキア(7位)、アイスランド(11位)、チュニジア。
◇C組　ルーマニア(1位)、西ドイツ(6位)、ノルウェー、スペイン。
◇D組　日本(10位)、ユーゴスラビア(3位)、ハンガリー(8位)、アメリカ
（注）日本の試合順序はユーゴ(8月30日)、ハンガリー(9月1日)、アメリカ(9月3日)。
（試合スケジュールは本誌5頁参照）

ラッキーな顔合せ

○……聖火のもとで日本の競う相手国が決まった。

組み合せは本誌前号既報のとおり参加16ケ国を2年前の世界選手権の順位を基準に4つのランクに分け、各ランクから1ケ国づつ抽き分けて決められた。

世界選手権10位の日本は第3ランク（ソビエト、アイスランド、ノルウェーと同じ）に属し苦手ソビエトとの対戦をはじめからさけることができており、関係者は第1ランク（ルーマニア、東ドイツ、ユーゴスラビア、デンマーク）ではデンマークかユーゴ、第2ランク（西ドイツ、スウェーデン、チェコ、ハンガリー）ではハンガリーかスウェーデンを抽きあてればと願っていた。まさにそのとおりとなり、これほどのラッキーはあるまい。

○……これまでユーゴとは1勝1分、ハンガリーとは1勝2敗1分、アメリカとは1勝の成績。

各国戦力のレベルアップを考えれば過去のデータがそのまま通用するとは思わぬが〝負い目〟がないだけでも気楽なハズだ。

浅からぬ因縁・ユーゴ

○……ユーゴスラビアとは浅からぬ因縁ができた感じである。

日本と同型の速攻を主武器にヨーロッパの〝暴れん坊〟として名を売っていたのだが、3年前、ユーゴで開いたタシマイダンカップに日本を招待、日本は得意のスピードプレーを活かし、自信満々のユーゴを19—18で降した。

この一戦はヨーロッパじゅうをあっといわせ、「日本強し」を印象ずけるキッカケにもなった。さらに2年前の第7回世界選手権（パリ）では予選リーグで優勝候補にあげられていた同国と再び大激戦、17—17で引き分け、センセーショナルな話題をまいた。

○……ハンガリーとの4試合はいずれも接戦、しかも最近3試合は1勝1分1敗（総スコアは65—75）と互角を示し、日本にとって勝算の充分に立つ相手といえよう。

アメリカは、今回の出場国のなかではチュニジアとともに、もっともやりやすいチームとみられていた。

（藤本　強）

これまでの対戦記録

▽対ユーゴ（2試合）

日本 19（6—10、13—8）18 ユーゴ
=昭44・6・28（ユーゴ）

日本 17（9—7、8—10）17 ユーゴ
=昭45・2・28（フランス、世界選手権）

▽対ハンガリー（4試合）

ハンガリー 30（16—13、14—12）25 日本
=昭42・1・12（スウェーデン、世選）

日本 24（10—10、14—13）23 ハンガリー
=昭44・6・20（ハンガリー）

ハンガリー 31（18—12、13—8）20 日本
=昭44・6・21（ハンガリー）

日本 21（12—10、9—11）21 ハンガリー
=昭44・7・2（ユーゴ）

▽対アメリカ（1試合）

日本 21（11—8、10—7）15 アメリカ
=昭45・3・1（フランス、世界選手権）

ベスト8が射程距離に

「組み合せ決定」を聞いた関係者は次のように話している。

荒川理事長……ルーマニア、東ドイツとからまねばいけると踏んでいただけに願ってもない組み合せだ。〝ベスト8〟がこれではっきり射程距離に入ったといえる。ユーゴー、ハンガリーの両方から勝ち点をあげるのも夢ではなかろう。アメリカにとりこぼすようなことはまずあるまい。

村田オリンピック対策部長…ベスト8入りはフィフティ・フィフティと見ていたが、この組み合せなら70％近い確率が生まれたといってよいのではないか。

メンバーに変動はあるだろうがこの3年内にいずれも対戦している国なのはありがたい。恵れたクジ運といえる。

杉山企画担当常務理事…ユーゴには不利、ハンガリーには有利、アメリカ戦は油断しなければ大丈夫。オリンピックという檜舞台で宿願のベストエイト入りを果たすことができそうだ。金メダル争いは世界選手権と同じルーマニア×東ドイツになりそう。

オリンピック第2次候補を発表

代表選考大詰へ

日本協会は4月28日東京で「ミュンヘン・オリンピック第2次候補選手」18名（GK4、FP14）を発表、晴れのオリンピック代表選手はこの18名のなかから6月11日に選考することも明らかにした。ミュンヘンへの道はいよいよ最終段階へ進んだわけだ。

発表された18名は、当初の方針どおり、先に決定の「昭和47年度ナショナルプレイヤー」（25名）のなかから選ばれたものである。

第1次候補選手（1月19日発表）がそのままナショナルプレイヤーに推されたこともあり、7名が改めてふるい落とされたわけだが、選考にあたったオリンピック対策部では、すでに3月のTHW・キール戦で20名、4月のGW・ダンケルセン戦で18名とメンバーをしぼって来ており2月の強化合宿を加えると三段階の選考を経たことになる、といっている。結果的にはダンケルセン戦の全日本がそのまま第2次候補（最終候補）となったわけだ。

オリンピック第2次候補選手

▽GK（4名）

氏名	年齢	身長	出身—所属
下里　敏彦	(25)	184cm	熊本市商—大崎電気
本田　洋	(25)	179	日体大—大阪イーグルス
大村　久	(23)	178	日体大—山梨教員ク
馬淵　豊明	(23)	180	立教大—「全立教」

▽FP（14名）

氏名	年齢	身長	出身—所属
木野　実	(26)	180	立教大—ワクナガ薬品
近森　克彦	(26)	183	芝浦工大—大崎電気
飯田　誠行	(26)	188	同志社大—大崎電気
東　一敏	(26)	179	立教大—大崎電気
野田　清	(26)	170	立教大—大同製鋼
早川　清孝	(25)	180	日体大—ワクナガ薬品
藤中　憲二	(24)	178	日体大—大同製鋼
有永　修二	(23)	187	立教大—東京海上火災
斎藤　光男	(23)	183	日体大—群馬教員ク
中井　武三	(23)	180	同志社大—大同製鋼
氷海　正行	(22)	180	日体大—千葉教員ク
新実　俊夫	(22)	180	芝浦工大—本田技研
大江　隆夫	(22)	171	芝浦工大—三菱レイヨン
佐々木健一	(22)	172	明星高—中央大

学生界からは佐々木一人

第2次候補で注目されるのは現役学生が佐々木（中大4年）一人になってしまった点だ。

花輪（中大）が惜しくも選にもれ、しかも昨シーズン活躍した新実(芝工大—本田技研)、大江（芝工大—三菱レイヨン)、氷海(日体大—千葉教員ク)、馬淵(立教大—メルボ紳士服KK・全立教）らが学窓を卒えて社会人となり、1月の選考時点でオリンピックへの即戦力という考えから若手の登用をおさえたのも影響している。長いあいだ日本ハンドボール界の最頂点を占めていた学生界が、その座を社会人（実業団）に譲ったともいえ、時の流れを強く感じさせる。

激しい代表争いを予想

日本協会でははじめ、第2次候補選手は、5月のヨーロッパ遠征選手として15名前後を発表、帰国後代表選手を選考することにしていたのだが、同遠征がとりやめになったため(本誌7頁参照)、構想を変更して18人をリストアップ、この中から代表選手を選ぶ方針を固めた。

別掲（4頁）のように代表選手の人数は11名か12名か現時点では未定だが、いずれの場合でもGKだけは2名の線が確定、4者のポジション争いがはっきりしている。

FPについても9〜10名の数字は動かないだけに14選手の激しい競争は最後までつづきそうである。

選考方法などは5月の常務理事会で話合われよう。

微妙になったコーチの派遣

コーチングスタッフについては日本オリンピック委員会(JOC)からの配分では補助コーチ1名を加えて一応2名確保されているが選手権の1名減をこのワクからカバーすべきだ。

という意見が支配的で、コーチの派遣はがぜん微妙な問題になってきた。5月13日の月例常務理事会での協議が注目されよう。

なお、コーチングスタッフは1月14日の月例常務理事会でオリンピック対策部の村田弘、竹野奉昭両氏のほか、村田氏から勝繁夫、渡辺慶寿、北川勇喜の3氏を第一次(2月)、第2次（3月）合宿のためコーチに加えるよう荒川理事長に要望があった。第三次（4月）でも特に異動は発表されず、6月11日までに合宿は1回だけということから、この五氏がそのまま残り、コーチをミュンヘンに送る場合は、このなかから選ばれる公算が強くなった。

鹿児島国体参加に特例

オリンピック参加選手

日本協会では4月14日の月例常務理事会でオリンピック選手の国内試合出場について協議、次のように決定した。

一、オリンピック出場選手は6月26日以降オリンピック終了まで一切の国内試合出場を規制する。

一、オリンピック出場選手は第27回国体（10月23〜27日・鹿児島県隼人町）には、都道府県及びブロック予選会に出場していなくても参加を認める。

◇

全日本代表選手の国内試合出場規制についてはこれまでも賛否両論があり、日本協会執行部ではむしろ「規制無用」の声が強く、今シーズンはこれまでナショナルプレイヤー（オリンピック候補）の出場についてはまったく制限をくわえていなかった。

しかし、オリンピックの直前は規制を布いて最後の仕上げに専念したいというオリンピック対策部の意向をうけいれた。

国体については実施要項・総則第5項の6「特に定められる者のほか、都道府県予選（地区予選会を含む）を通過した者であること〜下略」の冒頭部分を適用、参加への道を開いた。

オリンピック代表

6月11日、全国会議(評議員会 理事会)で決定

史上初のオリンピック代表選手は42日後の6月11日正式決定されることになった――日本ハンドボールチームのミュンヘンオリンピック出場選手数は本誌前号速報のとおり日本オリンピック委員会(JOC)によって役員1名、選手11名(役員1は選手を兼ねることもできる)と決定したが、日本協会は4月14日の月例常務理事会で荒川理事長から経過報告をうけたあと、オリンピック代表の選考について約2時間にわたり協議した。

その結果、代表の決定は6月11日東京に全国評議員会、同理事会(場合によっては合同会議)を招集して行うことを決めた。(注・会議招集は5月20日付の予定)

ながい議論となったのは役員1のワクをコーチ兼選手として「12名のプレイヤー」を送るか「役員1、プレイヤー11」とするかだった。いずれも一長一短があるうえ各常務理事(出席15名)の意見が分かれたため次回(5月13日)まで研究課題として保留された。

しかし、次回でも議論百出となり容易に結論は導き出せないものと予想され、その場合は荒川理事長が〝決断〟するか、あるいは6月11日まで二本建てのまま進むことも充分に考えられる。

なお、4月26日のJOC総会(渡辺和JOC委員出席)で補助コーチ1名がJOCから派遣されることに決まった。

次回の合宿を最終資料に

全国会議招集日の決定で最終承認の段どりは整られたが、それまでの手順としては、欧州遠征の中止(本誌7頁参照)によって新たな方針が必要となり、この日の会議では、基本線として5月22日からの強化合宿(47年度第2次、6月4日まで名古屋を予定)を〝最終資料〟にオリンピック対策部と荒川理事長らが「原案」をつくることになる模様。

肝心の選手数に不鮮明さはあるが、いよいよ晴れの代表決定の時がせまって来た――。

荒川理事長の話 選手数を11とするか12とするかは実に重大な問題だ。会議では1人でも選手を多く送り強行日程(最低5試合)に備えるべきだという意見と、選手に雑務を含む監督任務を負はせるのは酷でむしろ戦力的にもマイナスだとする声に分かれた。補助コーチ1名のワクがとれたこともあり最善の〝選手団〟を編成するよう検討したい。

選手数決定 経過と解説

オリンピックへの参加を決め、申しこめるのはその国のオリンピック委員会だけである。

日本のハンドボール界は、永年の夢を実らせてアジア予選に勝ち抜き出場権を獲得したが、その時点でミュンヘンの道が通じたわけではない。

日本オリンピック委員会(JOC)がどう評価するか。日本協会首脳陣は昨秋以来今日までかなり深刻な表情であった。

日本のスポーツ界における斯界の立ち場は歴史の浅さ、オリンピック参加経験なしというハンデも手伝って決して強いものではない。

東京オリンピックでは、いちどは実施が決まりながら種目削減という〝悪夢〟にあっている。「アジア予選で出場権を獲得してもオリンピック参加については改めて検討する」(JOC45年9月26日付公文書)という〝一本の釘〟も首脳陣の頭のなかには、重く打ちこまれていたのである。(注・この公文書は45年10月盛岡で開いた全国評議員会、同理事会で田村会長、荒川理事長から報告されていた)

ミュンヘン出場にどうやらメドがついたのは「今春1月、政府の体協予算復活があった時」(荒川理事長)といい、それでも田村会長や荒川理事長は2月の全国評議員会、同理事会席上では楽観した発言を控えている。

JOCの〝作業〟は札幌オリンピック終了後の二月末から始ったようだ。

3月7日、ミュンヘンオリンピックで実施される21競技のうち日本が出場できる19競技と各国内団体と個別予備折衝が行われた。

日本協会からは荒川理事長、村田オリンピック対策部長が出席、JOC強化委員会と約30分間の話合いで日本ハンドボール界の国際的水準、全日本チームの強化現況などを説明した。

この時は、派遣について正式な態度表明はなかったが、「世界6位のスウェーデンに1勝3敗という資料が評価されたと思う」(村田部長)

3月17日に〝派遣〟が確定

正式に参加が決定したのは3月17日のJOC常任委員会。同委が「メキシコオリンピック派遣選手数の185人を上廻らない範囲で全競技に参加する」との選手団編成を明らかにしたのである。

翌18日、駒沢屋内球技場で行われたキール対全日体大戦に姿を見せた荒川理事長は、喜びというよりホットしたと形容するほうがよい表情で、いかにアジア予選以後同理事長がこの問題に腐心していたか察せられた。

派遣決定後の問題は〝人数〟。すでに発表されていたハンドボール競技実施要項では1国役員2名、選手16名までのエントリーが認められており、日本協会もJOC、日本体協などにはその数字を申し入れてあったが、前述のとおり選手団編成方針として「185人」というワクがはめられた以上、フルエントリーは望むべくもなかった。

7日の話合い席上、強化委員側は競技規則に定められた「ベンチへ入れる人数」(注・12名)を一つの線として示しており、荒川、村田両氏は「14名」を強く要望したこともあり3月21日の常任委と荒川理事長の折衝は大いに注目された。

予想下回る派遣人数

役員1、選手11。示された数字は予想もしていなかったものである。荒川理事長はこの算出根拠の説明を求める一方「1日おきに試

合が行われる。GK、FPという競技者の特殊性。レギュラーだけではなく控選手を含めた総合戦力がポイントである点」を強調、再考を期待した。

これに対し常任委は「実績のない種目と金メダル有望種目以外はできるだけ人数を制限する」という精鋭主義、金メダル重点の実績優先主義を明きらかにし「〃金メダル有望〃に該当しない球技はベンチ入りできる人数から一名減」が基本線、その他の云いぶんも「各競技共通の問題でハンドボールだけ例外にはできない」とはねつけた。

荒川理事長は「実績とは何か、ハンドボールは今回が初参加である」と質問したが「初出場即資料なし」とされ、数分の押し問題が繰り返されただけだった。

あくまでフルエントリーに近い線を望む荒川理事長の「役員1、選手12」も認められず、さらに「3〜5名の選手の自費参加を認めてもらえないか」との発言も「前例がない。選手団の統制上問題がある」ということで却下された。「悪くても役員1、選手12」と踏んでいた日本協会の見通しは金メダル重点主義に押し流される結果となり、3月30日のJOC総会で正式決定となった。

「ハンドボール初参加の道を開くJOCの評価には改めて感謝の意を表するものだが、派遣人数については釈然としない」という荒川理事長の総会後の発言は斯界を代表した声といえよう。

たしかに、ベンチへ入れる人数から1名減という方針は筋を通したようでまったく〃現場〃を知らない数字といえる。

19競技にフルエントリーするとその数は532人に及ぶといわれ、これは実現性がないとしても球技ならば、せめて「戦力として最低の人数」を派遣する配慮があってもと思う。〃精鋭主義〃に反しはしなかったと思う。ハンドボールの場合、12人におさえてもすでに4名減なのである。

戦力的マイナスは明らか
どう活かす「補助コーチ」

役員1、選手11と決まって日本協会のオリンピック構想はある面で一から出直しである。

その意味を含んで荒川理事長はJOC総会席上（注・渡辺和JOC委員の代理出席）「役員1をコーチ兼選手にふりかえ選手12名としてもよいか」と発言了承を得ている。

別掲のようにミュンヘンでのハンドボール競技は8月30日の第1戦以降原則として1日おきに行われる。技倆のほかスタミナ、精神力が上位進出には必要だ。すさまじいばかりの国際試合、ましてやオリンピックという檜舞台であれば全16ケ国がメダルを狙ってしのぎをけずる。エキサイトした展開は必至であり残念なことながら負傷者を予想しなくてはならない。16名を引きつれる各国に比べて戦力的マイナスは明きらかだ。その場合、4月26日のJOC総会で認められた「補助コーチ」のワクをどう活かすかが一つのカギとなろう。

ミュンヘンに参加できたのだから、と喜んではいられない。

例えば3月初めの時点では出場資格があるにもかかわらずウォーター・ポロ、ヨット、ボートなどは8位以内の見こみがうすいとして〃派遣ゼロ〃であったと伝えられる。ミュンヘンでよい成績をあげないとモントリオールのハンドボールは楽観を許さない。

オリンピック派遣費は貴重な国庫からのもの、すでにオリンピックが「参加することに意義」といった時代でないのも判るが、すべて〃勝利〃を基準にモノを考えることが正しいとは思わない。

限られた範囲でベストエイトを目指しいかに最善をつくすか。

日本ハンドボール界の前途はいぜんけわしいようである。（杉山）

ミュンヘンオリンピック ハンドボール競技日程

（本誌調べ・時間は現地時間）

▼予選リーグ（4組）
▽第1日（8月30日＝大会第5日）
第1試合　19時
第2試合　20時15分 }（4会場一斉）
▽第2日（9月1日）
時間など第1日に同じ
▽第3日（9月3日）
時間など第1，2日に同じ

▼準決勝リーグ及び順位決定予備戦
▽第4日（9月5日）＝準決勝リーグ第1日
第1試合 15.30
第2試合 16.45
…………………
第3試合 20.00
第4試合 21.15
▽第5日（9月6日）＝順位決定予備戦日
第1試合 15.30 }
第2試合 16.45 } 13〜16位決定予備戦
第1試合 20.00 }
第2試合 21.15 } 9〜12位決定予備戦
▽第6日（9月7日）＝準決勝リーグ第2日
時間は第4日に同じ

▼順位決定戦
第7日（9月8日）
13.14位決定戦　15.30
11.12位決定戦　16.45
…………………
15.16位決定戦　20.00
9.10位決定戦　21.15
▽第8日（9月9日）
7.8 位決定戦　10.00
3.4 位決定戦　11.30
…………………
5.6 位決定戦　21.00
1.2 位決定戦　23.00

（注）第4日以降の会場はすべてミュンヘン

全日本男子（オリンピック候補）

欧州遠征を断念

受け入れ態勢整わず

日本協会は5月に予定した全日本男子（オリンピック候補）のヨーロッパ遠征を取りやめることに決めた。

この遠征はオリンピック強化対策の〝仕上げ〟ともなるべきもので各方面から成果が注目されていたのだが、オリンピック対策部が希望した相手国のうち〝焦点〟とみられたルーマニア、チェコ両国が「受け入れ不能」という返電を寄せたほかノルウェーは1試合、西ドイツはクラブチームならという条件づきだった。

日本協会は世界選手権1位のルーマニアをはじめ同5位西ドイツ、同6位スウェーデン、同7位チェコの4強とノルウェー、ポーランドの計6ケ国に、5月10日頃から各国2試合、約4週間の遠征をプランニングした。ところが各国ともすでにオリンピックに照準をあてた綿密な強化日程を編成ずみなため4月中旬までに日本の希望の全面的受け入れを承諾して来た国はスウェーデンとポーランドだけ。

日本協会は4月14日の月例常務理事会で善後策を協議、相手側がナショナチームまたは準ナショナルチームでなければ強化の対象にならない、他国と交渉する時間的余裕はないなどの理由から中止の方向に傾き、村田オリンピック対策部長も「少くとも5ケ国に遠征しなければ無意味」であるとしたため、各国の返電を4月20日まで待って結論を出すことになった。

しかし20日になっても進展はなく、荒川理事長、久田国際担当常務理事らが21日全日本コーチングスタッフと会い、最終的な意見を求めた。若手コーチは、たとえ2～3ケ国でも遠征を希望したが、結局、各国に改めて打電したうえで受け入れが5ケ国にならない場合は「中止」とすることを了承、その結果27日までにノルウェーはナショナルと1試合だけ、西ドイツはGW・ダンケルセン（4月来日）ハンブルグSVならばという返事にとどまり中止と決まった。

今回の遠征計画は、長身選手に対するディフェンス、若手選手にキャリアをつませる、チームワークをより固めるなど上位入賞のための〝計画〟がもりこまれていたものだが、一方で各国に日本の手の内を知らすのはマイナス、選手の疲労などを理由に消極的な意見もあった。なお、遠征中止で5月以降の強化合宿の日程を変更するかどうかは近くコーチング・スタッフが協議する。また、ナショナルチームの〝公式戦〟がオリンピックまでまったく予定されないことになるためNHK杯（6月24～26日・大阪）への特別出場を再検討するよう一部から意見が出されたが見送られた。

◇

オリンピックで上位入賞を果たすにはどうしても事前のヨーロッパ遠征が必要、というオリンピック対策部の提案は昨秋の全国理事会、同評議員会にも出されていたが、予算的な裏付けがないままに年を越した。今春3月に入って林副会長（実連会長）をはじめとする実業団オーナーの理解でどうにか遠征費のメドがついたのだが、今度は相手側の事情で中止せざるを得なくなったのは残念である。

日本協会としては、今春早々有力実業団が中心となって計画した欧州遠征にストップをかけた〝事情〟もあり、5月の遠征が実現されるよう国際ハンドボール連盟・ホルル委員長の手までわずらわせるなど最大の努力を払っていた。

しかし、日本が望んだヨーロッパ各国はオリンピック強化路線を確立している点では有数な国ばかり。ルーマニアなどは「2年前に、今夏までの強化計画が一日刻みで作成されていた」（安藤常務理事）といわれ〝日本チームの遠征〟が急に割りこむのはかなり難しいといろみかたもあった。

「国内でじっくり時間をかけ調整・強化すべき課題も多い」（勝日本コーチ、常務理事）だけに〝中止〟にくじけず残る期間をより有効に使って欲しいものである。

ユーゴ戦、ハンガリー戦を応援

ミュンヘンオリンピック・ツアー

オリンピック初出場を果たす日本チームを応援する「ミュンヘンオリンピック見学とヨーロッパの旅」は、田中滋章常務理事が中心となって準備、折しようを進めて来たが、このほど大要が正式にまとまった。

すでにこの見学団については本誌でも紹介され、田中氏のもとに問合せがつづいているようだが、別掲のように日本の相手国も決まり、日本のベストエイト進出の大きなヤマ場となるユーゴ戦、ハンガリー戦が日程に組みこまれたこともあって、一気に定員に達するだろうとみられている。

なお、この見学事業は当初日本協会が「主催」になる予定だったがあくまでプライベートな性格であるため「後援」に変えられた。

見学団募集の詳細は各都道府県協会にも連絡されている。

○…見学団要項（抜萃）…○

▽期間、8月26日から16日間（出発8月26日羽田発、帰国9月10日羽田着）

▽経費　三八五、〇〇〇円（入場券代金、渡航手続き代などは含まず）

▽募集人員　40名（先着）

▽申しこみ先、名古屋市千種区豊年町3の37　タヨシ産業・田中滋章氏。(電)〇五二(731)一四四六。

○……主な日程……○

・8月26日出発、27・28日ロンドン、29～1日ミュンヘン（試合見学8月30日、9月1日）、2日チューリッヒ、3～5日パリ、6～9日ローマ、10日帰国。

女子が初の遠征（全日本実業団）

～二つの日韓交流～

学生は男女が同時来日

二つの日韓交流が5、6月に相ついで行われる。まず、5月1日から11日まで全日本実業団女子選抜軍が訪韓、ソウル、釜山、全州で4試合する。

全日本実業団女子選抜軍 韓国遠征日程

- ▽第1戦 5月3日・対ソウル選抜（ソウル奨忠体育館）
- ▽第2戦 5日・対白花醸造1回戦（ソウル奨忠体育館）
- ▽第3戦 7日・対漢城女子大学（釜山体育館）
- ▽第4戦 9日・対白花醸造2回戦（全州体育館）

同選抜軍は本誌既報のとおり田中滋章全日本実連理事長を団長に役員4名と全国7チームから若手を中心に選抜した選手14（GK3 FP11）の計18名。日本の女子チームが韓国に遠征するのは初めてである。一行は1日15時50分大阪発の日航機で出発するが、対戦チームは白花醸造（昨年2月、7月来日）漢城女大と実業団、学生界のトップチームのほか第1戦でソウル選抜と顔を合せる。同チームは韓国女子ナショナルともいえる陣容が予想され注目を集めよう。

帰国は11日14時50分大阪着の予定。

一方、学生界の第6回（女子第2回）交流は6月9日韓国代表が来日、開幕する。

今年から男女同時来日が申し合はされ、女子は2年つづけて韓国側が遠征してくることになった。

韓国男女学生来日日程

- ▽第1戦 6月10日 男女とも対九州学生選抜（福岡県）
- ▽第2戦 12又は13日 男子対京都産業大、女子＝対甲子園学院大（京都）
- ▽第3戦 15日男女とも対東海学生選抜（名古屋）
- ▽第4戦 17日 男女とも対関東学生選抜（東京体育館）

来日チームの詳細は不明だが全日本学連は「男女とも単独チームではないか」といっている。

安藤、佐野、山田 3氏がパス

国際公認審判員試験試合で

日本協会・荒川理事長は4月14日の月例常務理事会で、昨秋国際ハンドボール連盟（IHF）E・ホルル技術委員長が来日の際、東京駒沢屋内球技場で行った国際公認審判員によるモデルゲームの結果、安藤純光、佐野和夫両氏がパスした旨、IHFから連絡（広報93号）があった、と発表した。

両氏のほか44年7月マドリッドのIHF国際公認審判員講習会に出席した山田計氏も〝合格者〟に加えられている。（注・山田氏は世界女子選手権に出場中でモデルゲームには参加しなかった）

<解説>荒川理事長は『ホルル委員長が「日本の審判員の実力をみたい」というのでモデルゲームを行ったが、まさか広報で結果を発表するような〝公式のテスト〟であるとは思わなかった』と今回の公表に驚きの表情をみせた。

しかし、ホルル委員長は、かねてから日本協会が日本人審判員の国際舞台登用を強く要望していたことに対する〝実力判断〟の絶好の機会とみたようで、モデルゲーム当日は、日本協会役員はもとより、同行していたリンケンバーガーIHF理事やオルソン、カールソン両審判員も遠ざけ〝採点〟をしていた、といわれる。

IHFでは、国際公認審判員の申請を毎年9月に締切り、その中から世界選手権などの登用者を指名するが、実績優先のため日本の審判員にチャンスがまわることはよほどのことがない限り難しいとみられていた。

今回、3氏がホルル氏のめがねにかなったことは大きな道が開かれたとみてよいだろう。

なお、山田氏はマドリッドの講習会で参加83審判員（27ヶ国）のうち、優秀の部に入っていたことが認められたもののようだ。

同氏は44年の講習会で行われたモデルゲームの決勝戦を担当している。

（X）

各学連代表で〝予選〟

NHK杯の学生代表

全日本学連は4月15日東京で新年度初の全国代表者会議を開き、NHK杯（6月23～25日・大阪）の出場チームは男女とも5月下旬名古屋で各学連代表チーム（単独または混成）による〝予選〟を行い、その勝者を推すことに決めた。

この日予定された任期満了にともなう役員の改選は西敏郎会長が病気療養中のため同会長の全快をまって6月頃行うこととした。

また、今年の全日本学生選手権は11月13日から5日間大阪で開く（本誌既報）。

全国から28チームが参加

全日本自衛隊選手権近づく

今年度最初の全国大会・第4回全日本自衛隊選手権は5月19、20、21の3日間東京駒沢屋内球技場(19日のみ駒沢第一球技場)に全国から男子28、女子6チームが参加して行われる。

□

自衛隊におけるハンドボール熱は高度成長。この大会を目指して各隊、各基地ともたいへんな意気ごみのようで盛会となろう。

発表された組み合せで目を引くのは前回のベスト・フォア(勝田、海上鹿屋＝第一航空群、海上宇都宮、第3術科学校)を準々決勝から登場させる思いきった扱いである。

自衛隊球界の場合、キャリア差がはげしく、一方で国体をはじめ各種全国大会に顔を出す実力チームもあれば、一方でレクリエーション的にハンドボールを親しむチームもある。このため有力とみられるチームを分散させたうえさらに〝4強〟を不戦シードして一・二回戦段階の勝敗的興味をできるだけそこなわないように仕組まれた。

日本協会も自衛隊球界の実情を考えてこのシステムを了承、また出場チームの登録についても、同一基地(隊)内からメンバーを分散させて編成したチームの出場を承認した。

優勝争いは例年どおり、勝田(陸・茨城、過去2連勝)を第1航空群、宇都宮らの海上勢が追うことになるだろう。

女子は6チーム出場

昨年から実施の女子は、東京の婦人自衛官やナースによる6チームが参加、日本協会長杯を争う。

○……男子……○

勝田(陸・茨城)
富士駐とん地(陸・静岡)
てるずき(海・神奈川)
幹部候補生学校(陸・福岡)
横須賀教育隊(海・神奈川)
十条(陸・東京)
第4航空群(海・千葉)
第2教育団(陸・山口)
神町6施設大隊(陸・山形)
百里(航・茨城)
釧路(陸・北海道)
館空クラブ(海・千葉)
朝霞(混成・東京)
第3術科学校(海・千葉)
宇都宮(海・栃木)
第1施設団(陸・埼玉)
三宿クラブ(混成・東京)
古河(陸・茨城)
徳島(海・徳島)
少年工科学校(陸・神奈川)
佐世保地方隊(海・長崎)
久里浜(陸・神奈川)
第2航空群(海・青森)
宇都宮1・2特(陸・栃木)
熊谷第2教育隊(航・埼玉)
下志津クラブ(陸・千葉)
体育学校学生(混成・東京)
第1航空群(海・鹿児島)

○……女子……○

高等看護学院 — 三宿レディス
婦人教育隊 — WACキューピッツ
中央病院 — 朝霞ワック

(所属はいずれも東京)

ミュンヘン公式メダルを発行…日本オリンピック委

日本オリンピック委員会(JOC)はこのほどミュンヘン・オリンピック参加記念公式メダルを作成し販売することになり発表した。

発行されるメダルは4種類63万個で各含有量は極めて高いものである。

JOCがこの事業を行うことにより、日本ハンドボール協会など各加盟競技団体は独自にスーベニアとしてのメダルを発行しないため、ミュンヘンオリンピックを記念した日本の公式メダルはこれだけとなる。

日本協会ではこの事業に全面的に協力することになり、希望者はつとめて日本ハンドボール協会を通じて購入するよう全国関係者に呼びかけている。

○…発行されるメダル…○

▽プラチナ　重量20g(含有量千分の千)販売価格一個六万円
▽金　重量18g(24金、含有量千分の999)販売価格一個二万八千円
▽銀　重量30g(含有量千分の千)販売価格　一個三千円
▽ブロンズ　販売価格　一個千六百円
▽特別セット(プラチナ・金・銀各一個のセット)販売価格一セット九万一千円

日本協会からのお願い　JOCの公式メダルについてのお問合せは日本協会事務局(東京都渋谷区神南1の1、03―467―七〇九七)まで。なお、購入申しこみ後のキャンセルはいかなる理由でも絶対に認めません。

47年度暫定予算決る

日本協会では登録料、加盟金などの値上げにともなう47年度一般会計予算の組みなおしを進めていたが、このほどまとまり、4月14日の月例常務理事会で神田財務担当常務理事から暫定予算として説明が行われた。

収入千三百万五千円をみこみ、支出については6月補正を行って決める

8月5日に推せん〆切り

全国中学生大会　実施要項を発表

日本協会は今夏8月18、19日愛知県長久手町（名古屋市郊外）で実施する「第1回全国中学生ハンドボール大会」の計画を進めているが、このほど同大会の実施要項と「全国中学生ハンドボール大会開催基準要項・案」を作成、4月14日の月例常務理事会で承認をうけた。これによって全国中学生大会は本格的なスタートを切ったわけで日本協会は運営の万全を期してさらに綿密な準備を行うことにしている。

発表された第1回大会の要項によると、参加チームは男女とも10チームで、ブロックを〝単位〟に出場校の推せんをうけることになった。推せん方法は各ブロックの事情もありブロック協会に一任のかたちだが、本誌の取材した範囲ではほとんどのブロックが所属都府県からの代表校によって資料大会の名による〝予選会〟を予定しているようだ。

〝問題点〟の一つとなっていた新潟県と長野県の扱いについては日本協会のブロック分けを適用することに全国中体連も了承、したがって両県は北信越ブロックに所属が確定した。各ブロックからの推せん締切りは8月5日と決められている。

試合はトーナメントで

試合方法は、当初9チーム出場で3チームづつ3組の予選リーグのあと各組同位者により順位戦を行うことになっていたが、チーム増により、トーナメントで運行と変更された。なお、1回戦の敗者でコンソレーションマッチも行われる。

一チームの構成は付添（監督）1、選手12の計13名、コートは原則としてアウト・ドア。

優勝チームには日本協会杯が授与される。

宿泊費は日本協会負担

経費については全国中体連側の「参加者にできるだけ負担をかけない」という要望にそって日本協会（中学問題検討委）も検討していたが、一チーム13名の宿泊費（8月17、18日の2泊）を全額負担することに決定した。

全国中体連は「理想は交通費も」としていたが、日本協会も財政上そこまでは応じられず、宿泊費までの線に落ち着いた。また、全参加者に対し「傷害保険」がかけられることになっており、競技はもとよりすべての面で安全に細心の注意が企られる。

「基準要項」も近く成立

「開催基準要項・案」は来年度以降の大会開催の骨子となるべきもの。大会趣旨、期間、参加数、参加資格など主要点は次のように提案されている。

▽大会趣旨　ハンドボール競技を通して心身ともに健全な青少年の育成と交友を深め、希望のある生活体験を与えるとともに技術の向上をはかる。

▽期間　夏期休暇中、3日間を限度とする。

▽参加数　日本協会の布く9つのブロックを推せん母体とし各ブロックから男女1チームづつを原則とする。

▽参加資格　1、日本国中学生であること。（編集部注・国籍は問わない）

2、各都道府県ハンドボール協会の推せんチームであること。

3、各学校の校長および校医の健康診断により許可された生徒または保護者および医師の健康診施により許可された生徒であること。

▽競技方法　日本協会競技規則を適用し、試合は予選リーグ及び決勝トーナメントとする。

▽費用　1、宿泊費については全額日本協会が負担する。

2、旅費については参加者側の負担とする。

3、参加者に日本協会で傷害保険をかける。

〝今後〟にも充分な配慮

早くても来年度からではないかとみられた全国中学生大会がいくつかの障害をのりこえて今夏実施となったのは、オリンピックムードが高まる斯界にとって二重の喜びといってよいだろう。

日本協会の非公式な調査では現在全国でハンドボール活動を行っている中学は男子500校、女子300校ぐらいといわれ、今春4月から「中学校指導要領」に復活したことと相まって、一気に〝中学ハンドボール〟の種まきが行われるものと希望がかけられる。

これにともなって日本協会の中学校対策はより底深く密度の濃いものにならなくてはいけない。とりわけ競技面での充実と並んで指導者の育成には充分な配慮が必要だ。

全国中体連が競技別の専門部組織を採ることは当分のあいだないものとみられており、日本協会がこれまでの各種別全日本選手権と同じような考えかたで中学界、中学大会をみているとせつかくの盛りあがりもあとがつづかなくなっ

てしまう。
その意味では、昨秋11月に編成されて以来、いくたの困難な問題を切りぬけて大会開催にこぎつけた中学問題検討委員会を「中学対策部(仮称)」に〝昇格〟させることも考えられてよいのではなかろうか。また、今年度の場合、中学対策を急ぐあまり、下部の意向を充分に吸いあげる余裕に乏しかったことは否めない。特にこれまで夏休みに〝中学大会〟を開いていた地方では混乱もあると伝えられる。第2回以降の教訓にすべきだろう。

なお、今年度全国大会を予定し青少年運動競技中央連絡協議会(日本体協、全国中体連など9団体で組織)から実施計画が発表された中学競技は16競技17大会。

ブロック選出中学委員　日本協会特別委員会「中学問題検討委」のブロック選出委員はその後次の4氏が発表された。

寺崎一夫(北信越)、滝川侃志(中国)楠原敏明(四国)、又吉栄久(沖縄)、

第1回全国中学生ハンドボール大会実施要項

▽主催　日本ハンドボール協会、全国中学校体育連盟、愛知県教育委員会

▽後援　愛知県、名古屋市、名古屋市教育委員会、愛知県体育協会、名古屋市体育協会

▽主管　愛知県ハンドボール協会
愛知県中・小学校体育連盟

▽目的　ハンドボール競技を通して心身ともに健全な少年の育成と交友を深め希望のある生活体験を与えるとともに技術の向上をはかる。

▽期日　昭和47年8月18日(金)19日(土)

▽場所　愛知県愛知郡長久手愛知県青少年公園

▽参加対象　一、全国のブロック代表(北海道、東北、関東、北信越、東海、近畿、中国、四国九州)男女各1チーム。
二、開催県代表(愛知)男女各1チーム。

▽参加人員　計260名(1チームの構成12名、付添(監督)1名、計13名)

▽競技規則　昭和47年度日本ハンドボール協会競技規則に準じて行う。
・試合時間、前半20分―休憩10分―後半20分
・延長戦の時、準決勝までは第1延長を行い、なお同点の場合は抽せん。
・優勝戦は正規とする。
・雨天の場合、体育館の都合で試合時間を短縮することがある

▽試合方法　トーナメント法とする(3位決定戦は行わない)
なお、1回戦敗者によって敗者戦を行なう。

▽組み合せ　日本ハンドボール協会で行なう。

▽表彰　上位4チームに賞状、優勝チームに日本ハンドボール協会杯

▽参加者保護・日本ハンドボール協会において全員(1チーム13名)傷害保険に加入する(日新火災海上保険KK、保険額20万円)
・各ブロック担当者と参加生徒保護者との連絡を密にする。

▽宿泊　愛知県青少年公園宿泊所(全員2泊)

▽経費・交通費　参加チーム負担とする。
・宿泊費　全額日本ハンドボール協会で負担する(1チーム13名)

▽申しこみ期日　昭和47年8月5日(土)=所定の用紙使用。

▽申しこみ先　名古屋市中川区下之一色町西の切9　愛知県小学生ハンドボール教室事務局(電話、052―301―七七九三)代表西川勤也。

▽その他一、日程・集合8月17日14時、・監督会議　8月17日15時、・開会式　8月17日16時〜いずれも愛知県青少年公園、・試合日程　8月18日9時―16時男女1、2回戦及び敗者戦、8月19日9時〜12時、男女準決勝及び優勝戦、・講習会　8月19日13時―15時、・閉会式8月19日15時(閉会式後解散)
二、ユニホーム　各チームは色ちがいで2着用意することが望ましい。
三、背番号は申しこみ書と同一にすること。
四、大会期間中、中学生の現状調査(意識調査、体力測定)を行なうかもしれない。
五、名古屋駅から青少年公園までの交通機関=イ、名古屋駅名鉄バスセンター発、青少年公園行8.47, 9.30, 9.43, 10.30, 10.43, 11.43, 12.43(以下略)
ロ、各古屋駅から地下鉄星ケ丘駅下車、同駅から名鉄バス青少年公園行。8.22, 9.57, 10.57, 11.18, 12.57, 13.18(以下略)

全日本〝本番〟へ自信の攻守示す

～ダンケルセン2勝1敗で帰国～

大同製鋼、食下がり及ばず

10回目の日独親善

ヨーロッパ球界屈指の名門西ドイツの「グルンワイス(GW)・ダンケルン」を迎えての日独国際親善試合は4月2日から8日まで富士、名古屋、大阪の各市で3試合を行った。

GW・ダンケルセンは昨年の11人制及び7人制西ドイツチャンピオンにふさわしい洗錬された攻守と、11人制の長所を存分に活かした直線的な攻撃で富士ク(静岡)、大同製鋼（愛知）を圧倒した。

第3戦はオリンピック強化試合として全日本と顔を合わせ、国内ではかってないエキサイトした展開となったが全日本はいちだんとたくましさを加えたチームプレーで優勢に試合を進め快勝。ダンケルセンは2勝1敗の成績を残して4月9日大阪から空路帰途についた。

なお、このシリーズは昭和13年のヒットラー・ユーゲントチームの来日を第1回に10回目の日独国際交流であった。

富士ク、体格差はっきり

第1戦、富士クラブ（静岡）との試合は4月2日午後4時15分から富士市私立富士見高校体育館で行われた。審判＝安藤純光、岡前義春(ともに国際公認審判員)、観衆約一千。

GWダンケルセン 32（17―7、15―5）12 富士ク

得	【ダンケルセン】		【富士ク】	得
0	メイヤー	GK	渡辺哲(芝浦工大出)	0
0	ギーゼキング	GK		
3	レーゼ	FP	丸山(富士高出)	0
6	ベンク	FP	堀(明治大出)	0
3	ドレツゲマイヤー	FP	竹内(中京大出)	2
3	シュラー	FP	藤井(明治大出)	2
4	ブールメイスター	FP	寺田(日体大出)	4
5	クロツケル	FP	長田(順天堂大出)	0
3	クラマー	FP	佐藤(明治大)	4
3	ブツシュ	FP	坂本(御殿場高出)	0
2	リヨッツゲ	FP		
0	ホルストケツター	FP		
32	(5)	7MT	(3)	12

第1戦，ダンケルセンは善戦の富士クを振切った

観戦記

杉山　茂（NHK運動部）

○……会場は女学校の体育館。2階席のほかコートサイドにパイプ椅子が並んでいる。

「いい雰囲気じゃないか」とノルテ広報係。サイドラインぎりぎりまで観客を入れての試合はヨーロッパでも多い。本部席には市長をはじめ町の体育関係者が並び、静岡東部で初の国際試合は賑かに始った。

○……学生界で活躍した若手OBが中心の富士クは先制を狙って速い攻撃を仕掛けたが相手ディフェンスの長いリーチに阻まれてなかなかシュートチャンスをつかめない。

ダンケルセンはレーゼ、ベンクがゲームメーカーとなりローリングオフエンスから富士クの守りを崩しにかかり1分20秒、2分35秒クロッケルが左サイドから倒れこんで2―0、4分25秒7MTで加点しあっさり主導権を握った。

○……富士クは4分50秒、竹内が右から左へ流れこみながらのジャンプシュートを決めて初ゴール、その後も再三いい形になったのだが、放つシュートはほとんど相手FP陣の手ではじき返された。

富士クのジャンプした高さとダンケルセン選手が手を伸ばすのとほとんど同じ

GW・ダンケルセン来日メンバー

団　長	K・H・ブルーンズ（GWDクラブ会長）
役　員	E・ブールメイスター（GWDハンドボール部長）
ヘッドコーチ	F・スパヌス（35）
アシスタント・コーチ（兼FP）	H・マイソール（32）　184cm・
報道役員	S・ノルテ（37）
マッサージ師	H・ベーフェルセン（31）

	氏名	年令	職業	身長	得点
▽GK	○ヴィルフライト・メイヤー	(29)	教員	186cm	・
	グンター・ギーゼキング	(25)	会社員	176	・
▽FP	○ベルント・ムンク	(29)	大学助手	181	①
	クラウス・バールラッハ	(32)	建築業	178	・
	△ハンス・スルク	(27)	教員	182	②
	○オットー・ベンク	(23)	会社員	182	⑨
	エリック・レーゼ	(24)	学生	189	⑦
	ブルクハルト・クロッケル	(23)	商店員	182	⑪
	ゲラルト・シュラー	(22)	技師	183	③
	○ヴィルフライト・ドレッゲマイヤー	(23)	学生	177	④
	△マンフレト・ホルストケッター	(31)	教員	186	・
	□ユルゲン・ブールメイスター	(22)	会社員	178	⑦
	ハイナー・リヨッツゲ	(23)	学生	183	③
	○ハンス・クラマー	(23)	学生	190	⑩
	ベルンハルト・ブッシュ	(20)	造園技師	200	⑧

○印はナショナルプレイヤー
□印はナショナルB
△印は元ナショナルプレイヤー
右欄の○内数字は日本での得点数
（　）内は年令

なのだから始末がわるい。それでも寺田、佐藤らの個人技を活かして21分30秒には5—9まで食い下った。

○……ダンケルセンは11人制のプレーの長所を巧く活かし、攻防両面で力感にあふれている。

全員が大きなパス、小さなパスを使い分け絶えず動き回っているし、GKから一気の速攻ではすばらしいロング・パスを通す。

最近来日した外国チームではいちばん速攻がうまいのではなかろうか。また、ボールを片手で自由にあやつるため、シュート態勢に入りながら不利とみるやパスに変えるプレーが平気でできる。それがフェイントとしての効果をあげて富士クをとまどわせた。

○……注目のブッシュは前後半とも10分すぎから登場した。2m選手のプレーは日本では初めて。7MTを含めて3ゴールをあげたが、急角度で投げ下すシュートはさすがに鋭い。

まだまだ荒けずりだがパスワークは多彩だし、フットワークもいい。巨人選手にあり勝ちな無器用さは感じられなかった。将来楽しみな若手である。

○……富士クは前半10点差をつけられながら後半よく走りスカイプレーなどを織りこんで善戦した。

しかし体格差、スピード差はどうすることもできず後半15分20—9からは一方的な経過となりダンケルセンはレーゼ、ドレッゲメイヤーのコンビ攻撃やクラマーのバックハンドシュートなど洗練された攻撃で容しやなく加点、富士クは散発的に得点を返しただけだった。

強引なダンケルセン

第2戦、大同製鋼（愛知）との試合は4月4日午後6時30分から名古屋市・愛知県体育館で行われた。

審判＝嶋田新太郎、稲石三二（ともに国際公認審判員）、観衆＝約三千

GWダンケルセン 22（13—8 / 9—6）14 大同製鋼

得	【ダンケルセン】		【大同】	得
0	メイヤー	GK	柳川	0
0	ギーゼキング	GK		
0	ホルストケッター	FP	野田	5
2	スルク	FP	藤中	2
1	ドレッゲマイヤー	FP	加藤	1
2	ベンク	FP	中井	3
5	ブッシュ	FP	木村	0
7	クラマー	FP	松原	3
1	リヨッツゲ	FP	小沢	0
3	ブールメイスター	FP	北村	0
0	レーゼ	FP		
1	クロッケル	FP		
22	(1)	7MT	(3)	14

観戦記

改田　智洋（朝日新聞名古屋本社運動部）

○……西独の名門クラブチームで「パワーとテクニックを備えたチームだ」とのふれ込みでやってきたGW・ダンケルセン。そして全日本のトップクラスにいる大同製鋼。単独チームの試合としては両国を代表する試合展開になると思われたが、大同製鋼はダンケルセンのパワーのハンドボールに完敗した。

○……試合開始直後、ダンケルセンはクラマーが左45度から強烈なシュートを決め、幸先のいいスタートを切った。だが、試合運びは個人技にたよっており、全体の動きそのものには、いまひとつ鋭さがなかった。ここを大同製鋼につかれた。

6分、中井からのロングパスを受けた野田が右からの倒込みショート。野田のもっとも得意とするシュートだし、ディフェンスからオフェンスへの切替えで、動きも早かったのできれいに決って追いついた。さらに8分、中井の7M

T12分、早いパスワークから新人松原（日体大出）が相手ディフェンスのスキをつくワンバウンドシュートを決めて差を拡げた。このあたりまったく大同ペースで試合が進んだ。

○……ダンケルセンは大同の動きに慣れると少しずつ立直った。そして持前のパワーに物をいわせて反撃に出た。ブッシュが強引とも思える力強いロングシュートをたて続けに決めて追いつく。その後一進一退が続いたものの、調子をつかんだダンケルセンはパワーに優るだけに強い。ヴェンクの鋭いミドルシュートや、右サイドから三角パスを使って中に切れ込んでのクロッケルのポストプレーなどのフォーメーションもおりまぜてじりじりと差をつけていった。

大同製鋼は中井、野田、藤中のナシュナルプレーヤーがどうにか頑張って得点はするが、それも7MT、GKがはじいた球を捨ってというもので、きれいなフォーメーションでダンケルセンのディフェンスラインをくずしてというものではない。

○……後半にはいるとこの差は一層ひどくなった。ダンケルセンが早い動きからのロングシュート、例によって右サイドからの三角パスを使ったポストプレーでたたみかけるように得点する。こうなっては大同製鋼はディフェンスがやっと。それも完全なディフェンスではなく、悪くいえばなんとなく守っているという感じでコンビネーションがとれていないため、なんでもないようなシュートを決められた。「いいディフェンスはいい攻撃を生む」といわれるが、このディフェンスではその攻撃も期待出来なかった。速攻も時折りみせるが、ダンケルセンの早い帰陣にはばまれ、スカイプレー、ポストプレーなどのフォーメーションをこころみても浮足だっているため簡単なパスワークなどのコンビネーションもとれなくなってしまい野田、藤中、中井の個人技にたよることになった。よいパスワークと速攻が身上の大同がこうなっては十分に力が発揮出来ないのは当然だ。新人松原も個人技には見るべきものはあったが、いまひとつチームに溶込んでいないという感じだった。

○……ダンケルセンもパワーではさすがという感じは受けたが、フォーメーションとなるとローリングのあと最後は右サイドから三角パスを使ってのポストプレーという単調なものだけしかみせなかったとはちょっとさびしかった。

第2戦・左腕クラマー，豪快なシュートを決める
（中日スポーツ提供）

全日本　多彩な攻撃、激しい守備

第3戦、全日本との試合は4月8日午後2時7分から大阪市立中央体育館で行われた。審判＝稲石三二、藤田信義（ともに国際公認審判員）、観衆＝約三千

全日本 15（7－6、8－5）11 GWダンケルセン

【全日本】		得		得	【ダンケルセン】
GK	本田（大阪イーグルス）	0	GK	0	メイヤー
	大村（全日体大）	0			
FP	有永（東京海上火災）	1	FP	1	ムンク
	飯田（大崎電気）	3		1	ベンク
	木野（ワクナガ薬品）	4		0	クラマー
	野田（大同製鋼）	2		5	クロッケル
	中井（大同製鋼）	0		0	ドレッゲマイヤー
	佐々木（中大）	4		0	ブールメイスター
	大江（三菱レイヨン）	0		4	レーゼ
	早川（ワクナガ薬品）	0		0	ホルストケッター
	新実（本田技研）	0		0	シュラー
	氷海（全日体大）	1		0	リヨッツゲ
		15	（2）7MT（2）	11	

後記
（全日本ヘッドコーチ）村田　弘

○……グンメルスバッハ、キールが全日本に大敗したことを信じないダンケルセンはどんなことがあっても勝ってみせると異常なほどファイトを燃やしていた。

大同戦で活躍した長身2mのブッシュを引っ込めてこれまで2試合に左肘の負傷から出場していなかったナショナルチームの主将ムンクを入れ期待通りのベストメンバーであった。全日本ははげしい防御で何としても勝つんだと云う気力で臨んだ。

ダンケルセンの特徴と云えば一線防御。はげしいぶちかましで相

手の攻撃を遮断し、ヨーロッパチームに見られない速攻を持ち早いパスのハンドリングによるフェンイトを利してのフォーメイションはスピードと変化に富み今迄来日した中では一番充実した実力を持っていた。

○……全日本は過去大阪市立中央体育館での試合で敗れたことのないと云う良い気分を持っていた。彼等の精力的な攻撃活動と強引な落差の大きいシュートに対しどこまで防御するかが勝敗の大きな鍵であった。富士と名古屋の2試合を見てローリングオフェンスからの切り込みとポストプレーへの変化、又ロングシュトに対して4・2デェフェンスで臨んだ。攻撃は平均身長185の高い一線防御に対して早いパスワークと動きの移動によってシュートに結びつける、そして速攻と奇襲のスカイプレーを使用する作戦で臨み失点13得点18に目標をおいた。

○……試合開始。リラックスの全日本に対しダンケルセンは殺気だっていた。2分フォーメイションプレーから有永が回り込んでうまいシュートを決め幸先よいスタートを切った。その次の攻撃でシュートした有永が相手のラフプレー気味のアタックで鼻柱を痛めつけられ退場し以後の展開に不安を残したがこの動機がかえって全日本の士気を盛り上げた。押し気味に試合を進めた全日本は10分3−0とリードした。この間ダンケルセンのローリングオフェンス、ポストプレーに対し防御の申し合わせを徹底し早いつぶしでのぞんだ。ダンケルセンは11分7米スローで初めての得点を挙げた。その後全日本はリードに気をよくし木野、飯田がクイックプレーから15分佐々木が中央速攻で得点を挙げた。ダンケルセンは日本の執拗な早いつめにあって思うように攻め切れずベンク、ムンクの徹底したマークは功を奏した。然しその間隙を縫って大同戦以前に足を痛めたレーゼにジャンプシュート2本、クロッケルに7米と、あと20秒に全日本の僅かのミスから決められ7−6と1点差に追いつかれた。

○……後半はへばらないで脚を使って前半同様の防御をやりさえすれば得点は取れると踏んだ。10分まで2つのスカイプレーと木野の見事なシュートで11−7とリードし有利に導いた。特にスカイプレーによりダンケルセンは防御の乱れを生じ興奮した様子であった。この辺から全日本の余裕、ダンケルセンの焦りは対照的にプレーにあらわれた。15分以後は一進一退が続き全日本は少しへばりが見えたがリードに守られてプレーができ7米2本と、佐々木、野田がシュートを決めた。追いつこうとあせるダンケルセンは攻撃リズムがもう一つ合ずシュートも決らず4点を入れたに止まり後半は8−5のスコアーで結局15−11で終了した。前半の大事な場面と後半の終了まぎわの7米スローを好捕したGK大村は一きわ光った。

最終戦，7MT2本を止めたGK大村(右)のファインプレーは全日本の勝因の一つであった

○……ヨーロッパ勢に勝ったため、ミュンヘンに入賞するためには〝防御だ〟とスローガンを打ち出して練習してきたことがこの試合の結果となって現われた。然しまだまだやらなければならない事を痛感した。

全日本は早いボール廻しで攻撃のリズムをよくし相手の一線防御をクイックプレーによりゆさぶり今迄の国際試合には見られない積極性と鋭さがあった。

彼らは試合の流れからくる判定に対して不服を云っていたがその

GW・ダンケルセンの横顔

グンメルスバッハ（46年4月来日）やTHW・キール（47年3月来日）と同ようダンケルセンも西ドイツリーグ（ブンデスリガ）での好成績の〝賞与〟としてクラブが極東遠征に送りだしてくれたものだ。

ダンケルセン市は入口4千の都市。クラブはハンドボール・バレーボールなど700人の会員をもつ

このクラブの特色はいぜんとして11人制に深い愛着を示している点でヨーロッパカップ、西ドイツ選手権をとりつづけている。一昨年は7人制とあわせてダブル・クラウンを誇る。

6〜8才クラスから年令別に12のチームをもち、一貫した〝ハンドボール教育〟が自慢だ。5〜9月が11人制、10〜4月が7人制と区別されておりどちらも人気があるという。

「グンメルスバッハやハンブルグSVが11人制を残してくればよかったのだが……」とスパヌス監督は惜しむ。今シーズンはオリンピックのため11人制の全国リーグは中止される。「斜陽化に拍車をかけなければいいが」という心配もある。GKのM・カールハー（ナショナルプレイヤー）が大学の試験で来られなかったほかはベストメンバーで来日。名手ムンクとベンクが揃ってヒジを痛め本調子でなかったが世界学生選手権で主将をつとめたドレッゲメイヤーや学生ナショナルの主力クラマー、将来を嘱望されているブッシュら若手が定評どおりの力と技を発揮した。

ノルテ報道係は「7人制でもきっと〝ダンケルセン時代〟が来る」と自信をもっている。

今シーズンの成績は北部リーグ3位（8勝4敗2分）。

気持は分る。又ラフプレーと思われる防御はあったが国際試合となればこれ位の事は当然と覚悟せねばならない。そのためにも今後益々防御体力の増強をつまねばなるまい。

全日本も一ヶ月前のキール戦の経験を生かせたこと、そしてこの勝利は大きな自信となり今後の飛躍への踏台としたい。（日本協会オリンピック対策部長）

スパヌス・ダンケルセンヘッドコーチの話　一昨年の春、世界選手権（フランス）で見た時より日本チームははるかに巧くなっている。

体格のハンデをショートパスとスピーディな動きでよくカバーしていると思う。

ナショナルチームならば西ドイツの全国リーグでも2、3位に食いこめるかもしれない。

ユニホームを交換　最終戦は、打倒全日本の闘志にもえたダンケルセンの荒いプレーに、日本側もやり合うなど日独交流ではかってないエキサイトした場面がつづいたが、試合が終ればそこはスポーツマン、握手をかわしたあと、全選手がその場でユニホームを交換する和やかな光景をみせた。野田、大江、佐々木らは大柄なダンケルセン選手のユニホームがダブダブ。ファンの笑いを誘った。

B・ムンク選手訪問

「ボクはオリンピック候補からはずれたョ。辞退したのだ。シュミット（グンメルスバッハ）も同調している」。

いきなりショッキングな話を聞かされた。「なぜ？」と聞くまもなく「過去の名声などがナショナルチーム編成の重要資料になっているようではいけないと思ったからだ」と熱っぽい口調でつづける。ヨーロッパでも屈指のテクニシャン・ムンクと194cmの巨砲シュミット（昨春来日）が脱けて西ドイツチームは大丈夫なのか。

なにかありそうだ。カール・ブルーンズ団長に〝事情〟を聞いてみた。

……ムンクやシュミットは西ドイツにとっていぜん貴重な戦力だ。だが彼らは今の西ドイツ協会のナショナルチームの選衡に不満があって辞めた。当分この問題はくすぶるだろう……。

軽卒に判断はできないが西ドイツ球界の内紛とうけとれる。アマチュア問題でしめ出されていたかっての僚友ルブキングが最近復帰したこともムンクにとって愉快な話ではないらしい。

「彼は優秀なプレイヤーだがもう西ドイツナショナルには必要のない〝老兵〟だ。西ドイツ協会も新聞記者も過去の実績にとらわれすぎる」そしてポッリと「だが彼（ルブキング）はナショナルでまたやるだろう」。

ルブキングのほか新鋭だけで西ドイツはミュンヘンのメダルを手にできると思うか―

「強いといわれている国の力は紙一重だ。昨日のチャンピオンも今日は8位といった具合だし、西ドイツにもチャンスは充分ある」

公式国際試合出場93回、300点近いゴールをその左腕からたたきだしているベテラン。7人制で2回、11人制で1回、世界選手権に出ている。

13才でハンドボールをはじめ現在はハノーバーの大学でスポーツと地理の助手をつとめている。

11人制と7人制どちらが好きか？

「夏は11人制、冬は7人制（笑）」

今までいちばん印象に残っている試合は―

「一九六八年チェコ協会創立記念試合のため編成された世界オールスターズの一員に選ばれたこと」

日本の印象は？「気にいった」

趣味は？「音楽。ポップスからオペレッタまでなんでも（笑）」

結婚しているが、子供はまだだという。

3週間前、ノルウェーとの国際試合で利き腕の左ヒジを痛め治療をまちがえ悪化させてしまった。医者にプレーをさしとめられ遠征中もベーフェルセン・マッサージ師がつききり。

最終戦（対全日本、大阪）で勇姿を初めて見せたが『投げる直前までシュートかパスか判らないフェイントプレーはさすが』と木野選手は舌をまいた。

西ドイツナショナルの主将をつとめる彼にチームメイトは一目も二目もおいていた。ベンチでも中央の座はムンクのために自然にあけられる。横綱の貫録だ。だが、話をしてみると陽気なナイス・ガイ。

「とてもプレーできるコンデイションではないのだが、日本のファンが待っていたそうなので出た。まさか皆さんにダンケルセンまで来てもらうわけにはいかないからね」（大阪で試合後の談話）―彼のような〝おとな〟を欠いて西ドイツは本当にやっていけるのだろうか。（S）

日独最終戦
ラフ・プレーは誰の責任か

光島磯雄（写真も）

誰の責任か？　レンズはみている!!　左の三枚の写真をとくと御覧ねがいたい。これは4月8日大阪で行われた全日本ナショナルチーム対GWダンカーゼンの試合でのスナップである。ユニフォームをつかむ、両腕で抱きつき片方の腕は首にまきついているほどの粗暴なホールディング場面。この試合をみていてはからずも丁度一年前の四月七日に同じ場所で行われたグンメルスバッハ戦の様相を思い出した。あの時は、グンメルスバッハチームは到着翌日のゲームであったためコンディション不良であったことは否めないが、皮肉なことには今回のGWダンカーゼンと共通点は、レフリーへの大きな不満のあったことである。トレーナーのシュパヌース氏、ダンカーゼンハンドボール部長エーリッヒ・ブルメスター氏や今回随行して来たドイツハンドボール誌の寄稿者であるジークフリート・ノルテ氏らロを極めてレフリーの不公平さをボヤいていたのである。私個人としては全日本チームがドイツの代表的強チームとして名高いダンカーゼンに勝利をおさめたことについて、愛好者の一人として素直に拍手を送るが、純粋なハンドボールの見方から観察するとき、いろいろの疑問点が夕立雲のごとく沸きおこってくるのを止めることが出来ないのである。

結果論であるとして諸賢のお叱りをうけることは覚悟の上で再びにくまれ口を書かせていただく。

現状ではまことにやむをえない要素も多いであろうけれども、端的に言って国際公認審判員諸氏はあまりにも日本的な笛の吹き方をしているように思われるのだ。

対キール戦を含めて、残念ながらあの六試合での審判員諸氏の吹笛ぶりは、国際試合を管掌するにふさわしい努力精進の成果が認められなかったと断じては言い過ぎであろうか。日本協会審判部はこの三月四日の対ドイツ戦に先立ち実際に国際試合として円滑なる審判技術に関しての研修をしたのであろうか。東洋の離れ小島という地理的条件から、見解判断の相違はやむをえないとしても、彼らをして日本の審判は公平さを欠くと思わせた原因はどこにあるか？。

我々はあの試合がそれほど不公平なものだったとは思っていないのであるが、この競技の普及の度合の比較という見方からすれば親善試合といえども両者の感覚の差は大きなものとなることは明らかであろう。ノルテ氏の言うには、あの試合がヨーロッパで行われていたら、審判員に対して観客席からの抗議が大きかっただろうとのこと。日本ハンドボールにおいてはまだ観客が集団的な態度にあらわして大いに抗議を示すという場面がみられないのは幸なのか不幸なのか？。不徹底な審判であれば、必ず選手はそれにマッチしたプレーで勝を得ようとするものである以上、前に掲げた写真のような粗暴プレーは早期にその芽を摘むようにしなければならない。

私が声を大にして申し上げたいことは、東洋と西洋の遠大なる距離を近いものにする方法の一つとして、「国際」と肩書きのつく審判員は、ハンドボール用語もしくは審判用語の必要最低限だけは、英語又はドイツ語で正確に伝達出来る技術をあわせ持たねばとうてい国際競技舞台に立つことは不可能であるとの見地から、彼らに対して特別の研修機会をもうけ、かつ今後はこの方面に資質を有する者の中から詮衡する方向に進むのが当然と言いたいのである。

各位最善の努力研究をのぞんでやまない。

海外遠征をした人達は異口同音に、日本の審判技術は悪いものではない、外国にはもっとひどいのもあるなどと感想をもらしてくれたりしたが、ここでのぼせてはいけない、重大な、根本的な要素が欠けているのだ。これを克服せぬかぎり、近い将来審判部は国際部門において、東洋でもっともおくれた存在と化すであろう。（投稿）

（注）チーム名と個人名の標記は原文のまま。

レンズは見た。このラフプレー

ダンカーゼンはしばしばラフなプレーを見せ，全日本は腕をつかまえられ，ユニホームを引かれ，あげくのはてはおさえつけられて顔をはられた。こうまで荒れた“原因”を考えたい……。

第1回～第10回 日独親善試合総記録（本誌調べ）

▽第1回 ヒットラー・ユーゲント来日（昭和13年9月16日・明治神宮競技場）

日体 19（11—3, 8—3）6 ヒットラー・ユーゲント

【日体】		【H・ユーゲント】
徳永	GK	レデッカー
菅	FB	ヴインタケル
陳		フォルク
金	HB	シュビールマン
中島		H・シュルツェ
李		トロシャー
和田	FW	シュレイト
崔		ハウト
馬場		ベッカー
南		オルツ
文		ディットマン
11	GT	12
10	FT	18

▽第2回 皇紀二千六百年奉祝東亜競技会ハンドボール（昭和15年6月、第1戦・9日神宮競技場、第2戦・16日橿原第二競技場）

日体 8（4—0, 4—5）5 在日ドイツ人選抜

日体 8（5—4, 3—1）5 在日ドイツ人選抜

▽第3回 訪日ドイツ艦隊ハンドボールチーム来日（昭和17年11月29日・明治神宮競技場）

全日本学生選抜 8（5—3, 3—4）7 訪日ドイツ艦隊

▽第4回 枢軸国交歓球技大会（昭和18年12月5日・明治神宮競技場）

全日本 11（3—4, 8—7）11 在日ドイツ人選抜

【全日本】		【在日ドイツ人選抜】
林（法大出）	GK	モザーネル
釘貫（早大出）	FB	ハンジェ
横山（早大出）		フィンク
井上（慶大出）	HB	ソック
藤田（日体出）		O・シュミット
酒井（早大出）		マッテルン
池田（日体出）	FW	ベルンスタイン
林（早大出）		ヘンペル
油井（日体出）		ベルンシュタイン
高橋（日体出）		W・シュミット
島田（慶大出）		オーミイヒエン
18	FT	21

▽第5回 西ドイツナショナル来日（昭和31年9月16日～30日、全国各地8試合）

西ドイツ 19（11—5, 8—3）8 全日本学生選抜

西ドイツ 24（11—6, 13—7）13 全東海

西ドイツ 21（11—5, 10—4）9 富山ク

西ドイツ 27（15—9, 12—7）16 全日本

【全日本】		【西ドイツ】
光島（日体大出）	GK	H・ジンゲル
天野（東教大出）	FB	ベルンハルト
桜井（芝工大出）		ティーマン
平地（東教大出）	HB	ケスラー
山本（日体大出）		ルッフ
中出（日体大出）		ギュンネマン
小林（芝工大出）	FW	ヴァンケ
柳沢（日体大出）		H・ヴィル
浅野（日体大出）		スターラー
村田（日体大出）		シェドリッヒ
皆川（日体大出）		R・ヴィル
（1）	13MT	（0）

▽交代【日】GK小野（日体大出）FW高山（日体大出）

西ドイツ 22（12—3, 10—3）6 全九州

西ドイツ 14（6—3, 8—2）5 全山口

西ドイツ 18（10—7, 8—3）10 関東学生

西ドイツ 28（14—5, 14—7）12 全日本

【全日本】	得		得	【西ドイツ】
星野（東教大出）	0	GK	0	ネレン
遠藤（日体大出）	0	FB	0	ベルンハルト
桜井（芝工大出）	0		2	ティーマン
斉藤（日体大出）	0	HB	1	ケスラー
山本（日体大出）	0		0	ルッフ
平地（東教大出）	0		0	ギュンネマン
幸田（日体大出）	0	FW	6	シェドリッヒ
新村（東教大出）	2		3	H・ヴィル
浅野（日体大出）	4		3	ケンパ
皆川（日体大出）	6		7	ダーリンガー
佐野（東教大出）	0		5	R・ヴィル
12	（2）	13MT	（0）	28

▽交代【日】GK小野（日体大出）

【ド】FWシュヴェンカー得1

（以上13試合は何れも11人制）

▽第6回 独艦ドイッチェランド号来日（昭和40年3月・日・駒沢屋内球技場）

全東京 38（23—4, 15—3）7 独艦ドイッチェランド号

▽第7回（女子第1回）西ドイツ選抜男女来日（昭和42年9月9日～27日、全国各地男子13試合、女子11試合）

▽男子

全芝工大 26（11—9, 15—10）19 西ドイツ選抜

全立教大 24（11—6, 13—5）11 西ドイツ選抜

西ドイツ選抜 23（14—9, 9—12）21 東日本選抜

西ドイツ選抜 33（16—12, 17—4）16 全仙台

西ドイツ選抜 18（10—8, 8—7）15 大崎電気（埼玉）

西ドイツ選抜 20（14—8, 6—4）12 中央大

西ドイツ選抜 17（11—2, 6—5）7 全早大

西ドイツ選抜 17（9—3, 8—7）10 菊松会（広島）

西ドイツ選抜 19（9—2, 10—11）13 全京大

西ドイツ選抜 14（6—6, 8—4）10 大阪イーグルス

西ドイツ選抜 19（9—5, 10—6）11 全静岡

西ドイツ選抜 24（11—8, 13—8）16 桜友会（東京）

全日本 23（13—8, 10—5）13 西ドイツ選抜

得	【西ドイツ】		【全日本】	得
0	デュエル	GK	福本（大崎電気）	0
0	ケッセマイヤー	GK	島崎（大阪イーグルス）	0
3	グルンワルド	FP	竹野（大崎電気）	2
5	メンダッハ	FP	近藤（大崎電気）	5
1	パール	FP	北井（埼玉教員ク）	2
0	バーテル	FP	木野（立教大）	2
3	イバース	FP	近森（芝浦工大）	5
1	グッシェル	FP	平岡（東京教大）	5
0	ゴルゲス	FP	井上（大崎電気）	2
0	ヒルマー	FP	西村（大崎電気）	0
0	ハルトビッヒ	FP	金田（大崎電気）	0
13	（2）	7MT	（2）	23

▽女子

西ドイツ選抜 7（3 4／6 0）6 大崎電気（埼玉）

三菱鉛筆（神奈川）11（5 6／4 5）9 西ドイツ選抜

西ドイツ選抜 9（5 4／5 3）8 東日本選抜

大崎電気 12（6 6／5 6）11 西ドイツ選抜

西ドイツ選抜 12（5 7／3 6）9 東京重機（東京）

愛知紡（愛知）12（4 8／3 4）7 西ドイツ選抜

田村紡（三重）17（9 8／7 4）11 西ドイツ選抜

西ドイツ選抜 13（5 8／6 4）10 大洋デパート（熊本）

西ドイツ選抜 9（5 4／5 3）8 全大阪

西ドイツ選抜 13（6 7／1 3）4 全静岡

全日本 8（3 5／4 3）7 西ドイツ選抜

得	【西ドイツ選抜】		【全日本】	得
0	ホイヤー	GK	渡辺美（田村紡）	0
0	ミューラー	FP	渡辺好（田村紡）	0
0	ケーラー	FP	水谷（田村紡）	0
1	ミルター	FP	小林（田村紡）	4
4	ネントビッヒ	FP	清水（田村紡）	1
1	ツン	FP	早川（大崎電気）	0
1	ロイター	FP	鈴木（大崎電気）	2
0	ポーリー	FP	種村（田村紡）	1
0	ケラー	FP	垂水（大洋デパート）	0
0	ビールカンツ	FP	新保（大洋デパート）	0
7	（4）	7MT	（2）	8

◇第8回 VfL・グンメルスバッハ来日（昭和46年4月7日～16日、全国各地6試合）

得	【グンメルスバッハ】		【全日本】	得
0	カーター	GK	本田（大阪イーグルス）	0
0	ハマン	GK		
0	J・ブラント	FP	飯田（大崎電気）	2
2	リンゲルバッハ	FP	木野（ワクナガ薬品）	4
2	ボルター	FP	野田（大同製鋼）	6
1	フェルドフ	FP	斉藤（群馬教員ク）	2
4	シュミット	FP	氷海（日体大）	1
0	K・ブラント	FP	藤中（大同製鋼）	4
1	ケラー	FP	中井（大同製鋼）	0
1	ベステベ	FP	花輪（中央大）	1
0	ブラウンスバイク	FP	早川（ワクナガ薬品）	1
		FP	平岡（東京教員）	1
11	（1）	7MT	（0）	22

▽交代【日】FP東、近藤（いずれも大崎電気）ともに得0。

全日本 22（10 12／6 5）11 グンメルスバッハ

グンメルスバッハ 25（11 14／6 7）13 全同志社

グンメルスバッハ 21（13 8／10 6）16 大同製鋼（愛知）

グンメルスバッハ 23（10 13／7 3）10 清商ク（静岡）

グンメルスバッハ 17（6 11／5 6）11 大崎電気

グンメルスバッハ 24（16 8／8 4）12 日体大

◇第9回 THW・キール来日（昭和47年3月14日～20日、全国各地3試合）

全日本 20（9 11／5 6）11 THW・キール

得	【キール】		【全日本】	得
0	ボイグト	GK	馬渕（立教大）	0
0	エールテル	GK	本田（大阪イーグルス）	0
2	バグーン	FP	有永（東京海上火災）	2
0	プレーン	FP	木野（ワクナガ薬品）	5
1	モール	FP	藤中（大同製鋼）	3
0	ベルク	FP	中井（大同製鋼）	1
0	ハルプス	FP	大江（芝浦工大）	0
4	ベルツ	FP	野田（大同製鋼）	2
1	ニールゼン	FP	飯田（大崎電気）	4
2	グレーパー	FP	氷海（日体大）	0
1	シュッツ	FP	新実（芝浦工大）	0
0	チンメルマン	FP	佐々木（中央大）	3
11	（0）	7MT	（0）	20

THW・キール 17（10 7／6 8）14 全日体大

THW・キール 22（14 8／4 9）13 大崎電気

◇第10回 GW・ダンケルセン来日（昭和47年4月2日～8日、全国各地3試合）本誌12頁～16頁参照

附・海外における日独ナショナルの交流

◇男子

西ドイツ 38（21 17／15 12）27 日本（昭42・1・13、世選）

西ドイツ 24（14 10／9 7）16 日本（昭44・7・9）

◇女子

西ドイツ 12（10 2／1 3）4 日本（昭37・6・24）

西ドイツ 13（6 7／5 2）7 日本（昭37・6・26）

西ドイツ 15（8 7／5 1）6 日本（昭37・7・12、世選）

西ドイツ 15（7 8／6 1）7 日本（昭40・11・7、世選）

日本 12（6 6／4 4）8 西ドイツ（昭40・11・14）

西ドイツ 10（5 5／3 4）7 日本（昭46・12・11、世選）

◇学生男子

西ドイツ学生 26（13 13／12 5）17 全日本学生（昭37・12・27）

たくましくなった守り

あと118日 全日本

全日本代表のミュンヘンオリンピックへの小手調べ、THW・キール、GW・ダンケルセンとの2試合はまずまずの結果で終った。昨春のグンメルスバッハ戦を口火にした国内における外国チームとの対戦はこれで一区切り。本番まであと118日とせまった全日本の周辺にスポットをあててみた。（編集部）

▽……キールに20−11、ダンケルセンに15−11。

両チームともヨーロッパ屈指の名門とはいえ、オリンピックでの上位入賞を果たそうとする全日本が敗れるようであってはまずい、という周囲の〝心配〟を吹きとばすような快勝だった。

特に2試合とも「失点は12点以内」（村田ヘッドコーチ）という目標をみごとに実らせたのだから、ふだんはいたって控え目な村田氏がダンケルセン戦後「守りは百点満点をつけてもいい」と手ばなしなのもムリはない。

▽……たしかに全日本のディフェンスはたくましくなった。

185cmをこす長身プレイヤー（FP）がキールには3人、ダンケルセンには4人いたがほとんどそのハンデを感じさせない。以前なら「まるで二階からシュートがとんでくるようだ」とか「相手はソフトボールを使っているみたい」などとお手あげの状態だったが、選手たちは〝長身封じ〟にすっかり自信をつけて立ちむかっている。

▽……その裏付けの一つになっているのは体力。一次（2月）、二次（3月）、三次（4月）合宿の大半をスタミナづくりにかけた成果だ。

過去4回の世界選手権出場で日本は外国に比べて戦術面、技術面では少しも劣ってはいない、課題は体力と精神力だという結論に達していた。

地味なウェートトレーニングに耐えることは体力、精神力の両面強化に役立つ。

昨秋のアジア予選以来久々に登場した全日本は存分に貯えた体力を爆発させ攻め守ったのである。

▽……「よい守備からよい攻撃が生まれる」とは村田ヘッドコーチの持論。

昨春のグンメルスバッハ戦以来全日本の外国チームとの対戦成績は11戦8勝3敗（3敗はいずれもスウェーデン）だが、勝った試合の失点はすべて11点以下だ。

11点以内におさえて敗れたのはスウェーデンとの第4戦における6−11だけである。

▽……問題がないわけではない。長身者に対する防禦は着々と成果をあげつつあるが、〝中肉型選手〟の突進にまだまだ対抗できぬ点は考えさせられる。

リンゲルバッハ（グンメルスバッハ、181cm、85K）、スヨデルベルグ（スウェーデン、179、80）、ベルッ（キール、178、76）、ハルプス（同、181、80）、ベンク（ダンケルセン、182、80）、クロッケル（同、182、82）といったタイプのプレーを防ぎ切れないのは本番での不安につながる。

▽……彼らの共通点はエネルギッシュなことだ。ゲームメーカーであり、チャンスメーカーであり、しかも相当な攻撃（得点）力を備えている。もちろん守りでも巾広い活躍を示す。185センチ以上の選手の中へ食いこんでいくには、ヨーロッパではよほど〝強力な武器〟がなくてはならないし、逆にそうした選手の存在はそのチームの柱であることが多い。〝中型対策〟を考えるべきだと思う。

▽……攻撃力はどうか。日本のスピード攻法は、アジア予選を見た国際ハンドボール連盟・ホルル技術委員長が帰国後各所で高い評価を示したことからいっそう有名になった。その特色は今回もいかんなく発揮され、小気味よいシュートを決めていたが、何よりも選手全員に平均した得点力がついたことは心強い。層が厚くなり誰が出ても組織力が崩れない。

▽……あと一息なのはいつもながらロングシュートのひ弱さである「10m以上の地点から射てる力に乏しい」――外国チームの日本評はハンで捺したようである。

体格が第一条件であり技術面だけで解決できない点に悩みはあるが、シュミット（グンメルスバッハ、196cm）、ボルター（同、194）、アンデルソン（スウェーデン、192）オルソン（同、194）、レフラー（イスラエル、186）、ニールゼン（キール、194）、クラマー（ダンケルセン190）、ブッシュ（同、200）らのプレーを見ていると、2〜3点差のハンディなら彼らの〝一発〟で簡単に取り返せる感じを抱く。相手に対する威圧感も大きい。

▽……この1年間、全日本が相手にしたGKがストリョーム（スウェーデン）、セラ（イスラエル）、ホイグト（キール）、メイヤー（ダンケルセン）と一流でもあったが豪快なシュートによる得点は数えるほどしかない。本田、下里、大村ら〝国際級〟と折り紙つきのGKが身近かにいるのだ。彼らを相手に長距離砲の特別訓練をこれまで以上に望んでおこう。

この成否は〝上位入賞〟の一つのカギである。

競技規則の一部改正について

日本協会審判部長

安藤純光

今回の競技規則の改正は一口にいって、内容的にはあまり大きな変化はない。従来の「原注」、複審制に関する規範などにあったものが競技規則に昇格させている。したがって条文は増加している。

以下今回の改正、改訂の主な部分について述べる。

なお、この機会をお借りして競技規則の解釈と運用を今後いかにすべきか、私見をまじえて提起しておきたいと思う。

競技規則改正の主な点

〔1〕競技場について

1の1、世界選手権大会ならびにオリンピック大会のときの競技場の大きさが示されている。

1の3、ゴールエリアにゴールの前方4Mのところに長さ15cmのゴールラインに平行なライン（マーク）をひく。

このラインは7Mラインから3Mの距離になる。7Mスローのときには GK を含めて防禦側は7Mラインから3Mはなれていなければならないが、GKが前に出て防禦することによって7Mスローを防ごうとするプレイが多くなっているので、7Mスローをするプレイヤーの手からボールがはなれるまで7Mラインから3Mはなれていたかどうかを判定するためのマークである（競技規則1の1図参照）。

〔2〕プレイヤーの背番号について

3の8、「……各種大会においてはNo.12以上の番号をつけてもよい。この場合No.16を第3のゴールキーパーの番号とする。……」

No.1とNo.12はGKであるが、さらに第3のGKの背番号はNo.16とすることになった。しかし国内の大会のときには従来の通りNo.13以後にする（3の8(注)参照）

〔3〕競技時間

4の7、ハーフタイムまたは競技終了直前にフリースロー、あるいは7Mスローが行なわれるときにはタイムキーパーがハーフタイムあるいは競技終了の笛を吹く前に、その一投がどんな結果になるか投げさせてみなければならない。

最後の一投については従来と同様であるが、タイムキーパーの笛がその最後の一投のあとに吹かれることになる。このことは4の7の〔原注〕に詳細に述べられている。

a　ゴールにボールが入ったとき（ゴールもしくはゴールキーパーにふれたときにはボールのゆくえを見て笛を吹く）

b　ボールがゴールラインを出たとき。

c　ボールがゴールエリアにとまるか、ゴールキーパーがキャッチしたとき。

d　ボールがはねかえったとき。

最後の一投が右のような状態になったときにタイムキーパーは終了の笛を吹くことになった。したがってそれが最後の一投であるかどうかをレフェリーもプレイヤーもしることができないことになる。レフェリーは、競技時間の経過について充分注意を払わなければならない。競技時間が残り少なくなったことを知らせる意味でタイムキーパーは終了30秒前に記録席の前に出て立つことになった。レフェリーは、これを見て残り時間の少なくなったことを知り最後の一投となった場合にはタイムキーパーはさらにジェスチアをもってノータイムを知らせる必要がある。タイムキーパーとレフェリーの密接な連絡が必要である。

〔4〕ボールのあつかい方

5の3、ボールをもって動く場合の歩数について、a、b、c、d、にわけて明示された。内容については変更はない。

5の11、ボールを故意にサイドラインまたはゴールラインから出すことはできない。

従来の通りであるが、しばしば問題として提起されていたゴールキーパーが競技場外（ゴールラインの方向）へ出すプレイについては「ボールをゴールエリアからゴールラインの外に出すときのゴールエリア内のゴールキーパーを除く」と明らかになった。つまりゴールエリアにいるゴールキーパーがボールをゴールラインの方向にはじき出すことはボールを故意に競技場外に出したことにはならないのである。

〔5〕ゴールキーパーについて

8の12、……このときフィルドプレイヤーはゴールエリアに入る前にユニフォームをかえなければならない。

GKの事故によってフィルドプレイヤーがGKになる場合には、ゴールエリアへ入る前に他のフィルドプレイヤーと区別できるGKのユニフォームを着なければならない。

〔6〕ゴールスローについて

12の2〔原注〕ゴールスローはキーパーの手からはなれたボールがゴールエリアラインを越えたときに終ったとみなす……。

他のスローの場合にはボールを投げるプレイヤーの手からボールがはなれたときにスローは終了したとみなすが、ゴールスローの場合には投げられたボールがゴールエリアラインを越えたときに終了とみなす。したがってその前にフリースローライン内に入ることは反則である。

〔7〕フリースローについて

13の1、(P)競技遅延が追加されたが、内容的には変りはない。

13の3〔原注〕フリースローを行なう前に攻撃側のプレイヤーがフリースローラインとゴールエリアラインの間にいて競技に影響するようなときには、その配置を正さなければならない。このときには笛を吹いてフリースローを行なう。

13の3〈申し合せ〉この項は味方競技場内における味方側（攻撃側）のフリースローのときにも適用する。したがって味方競技場からのフリースローのときの相手側フリースローラインの中にいてはいけない。ただし競技に影響のないときには反則にしない。

文章的には変化はないが、たとえば右サイドでフリースローが行

なわれるとき左のサイドで攻撃側プレイヤーがフリースローラインをふんでいたり、あるいはフリースローラインから出ようとしている（まだフリースローライン内にいる）ときにフリースローが行なわれたような場合、従来はラインクロスの反則がとられていたが、今回の改正では影響のない場合には反則としないことになった。だからといってフリースローラインの中に入ってもよいということではない（13の5および13の5（原注）参照）

13の7……反則があっても攻撃側のプレイヤーが充分にからだとボールを操作できる状態ならばフリースローの判定をしてはならない。

とくにこれらの場合には競技の進行を正確に予測する洞察力が必要である。

〔8〕**7Mスローについて**

14の8……反則があっても攻撃側のプレイヤーが充分にからだとボールを操作できる状態ならば7Mスローの判定してはならない。

フリースローの場合と同様に競技の進行とプレイを正確に観察して判断しなければならない。

〔9〕**レフェリーについて**

17の6……競技中レフェリーはサイドを交替すべきである。

17の6（注）レフェリーは競技中約5分をめやすにサイドを交替する。交替は得点のあったときあるいは7Mスローのときに行なう

レフェリーがより公平を期するために大体5分を目やすにして位置を交替する。この交替は得点のあったときあるいは7Mスローのときに行なう。このために得点や7Mスローがない場合には交替の時期が延長されることになる。交替するためにプレイから目をはなし（り）、支障を与えるようなことはさけなければならない。

17の7（注）7Mスロー、コーナースローの笛はセンターレフェリーが吹く。

7Mスローの場合にはセンターレフェリーとゴールレフェリーはゴールと7Mスローをするプレイヤーをはさんで対角線に位置してセンターレフェリーが笛を吹く（競技に関する留意事項4「7Mスローについて」参照）。ゴールインしたときにはゴールレフェリーが2笛吹いて得点を宣する。

コーナースローは従来ゴールレフェリーが笛を吹いていたがセンターレフェリーが笛を吹くことになった。

17の11　2名のレフェリーが得点、警告、退場、追放、失格を記録する。

レフェリーは、メモをもってそれぞれを記録することになった

競技規則の解釈と運用

先に述べたように競技規則は内容的には大きな改正はないのであるが、昨年行なわれた一連の国際試合、とくにミュンヘンオリムピック大会アジア予選の際のカールソン、オールソンの2人の国際審判員による明解なレフェリーぶりを目のあたりに見て、競技規則の運用の仕方に残念ながら大きな差を認めざるを得なかった。これは競技規則の改正によるものではなく、競技規則の解釈と運用の問題である。つまり笛の吹き方の問題である。大きくわけて次の3点をあげることができる。

1、アドバンテージの問題

日本におけるアドバンテージの解釈は、あまりにも拡大解釈されていたといえる。これにはいろいろな要素が影響していると考えられる。その一つは、ゲームを細切れにするな！　とか、ゲームを止めるな！　とか、ゲームを流れるように運営せよ！　などである。このために当然吹かれるべき笛が吹かれずにいたということである。つまり反則が反則としてとられていなかったことである。たとえばホールディングやプッシングがあってもボールが次へ展開して行けば、その反則をとらないことが攻撃側に有利であるという考え方から見逃がされていたのが現実であった。このことがゲーム全体をラフなものにしていたのである。とりもなおさずアドバンテージの拡大解釈である。先に述べた13の7および14の8の場合には防禦側の反則があっても攻撃側のプレイヤーがボールとからだを操作できる状態であればフリースロー、7Mスローを判定してはならないのであって、このときにはアドバンテージがあることになる。反則に対しては（とくに身体接触の場合）笛を吹くという原点に立ち帰って考えるべき問題がある。

2、警告、退場、フリースロー、7Mスローに対する判定の基準

判定の基準をしっかりともつことが、笛を明解にする大きな要素になる。警告を与えてないからということで「退場」になるべきものが警告になったりしている場合を見受けることがある。これらはそれぞれ独立したものであって、警告を与えていなくとも退場になるべきプレイに対しては退場を命じなくてはならないのである。

3、チャージングについて　この点については、さして問題はないように思われるが、しかし防禦に対して、いわゆる無理に突込むようなプレイに対してはチャージングの判定より防禦の反則がとられていることが多い。2人の間隔のせまい防禦に対して、その間に突込むようなプレイに対してもチャージングが判定されなければならない。

（了）

ミュンヘンオリンピック
ヨーロッパ予選会を見て

竹　野　奉　昭
（日本協会オリンピック対策部員）

3月14日から25日までスペインのバルセロナ市など8会場で行われた「ミュンヘンオリンピック・ヨーロッパ地域予選会」の決勝ラウンド以降を個人の資格で見学した。（編集部注・記録は本誌前号参照）

参加16ケ国のミュンヘンを目指す意欲はすさまじく、特に予選リーグから勝ち抜いたベスト8による決勝ラウンドは実力伯仲、どの試合も迫力に満ちたものだった。

まず私の見たバルセロナ市の第2組ではソビエトが圧倒的な強さを示した。

2年前の世界選手権（パリ）でソビエトが8位入賞を逸したのは当時も〝大番狂せ〟と騒がれており今回の快勝はむしろ当然といえた。

世界選手権の得点王マキシモフ（MAI・モスクワ）がいぜん劣えぬ攻撃力を誇り、31才のベテラン、クリモフ（MAI・モスクワ）も健在だった。

ソビエトに次いだのはポーランド。今シーズンは西ドイツ、スウェーデンを破るなど上り調子といわれ注目したがサワダ（スタル・ミェレク）、ディボル（グルンワルド・ポズナン）、プニオシンスキー（スポニア・グダンスク）ら比較的小柄な選手の活躍が目立った。GKスジムック（アニラナ・ロッズ）も巧い。

スペイン、スイスはこの両国に比べるとスケールが一まわり小さかったがソビエト戦はともかく、ポーランド戦では勝利を狙い、力の入った好ゲームを演じ、ヨーロッパ全般のレベルアップを印象づけた。

特にポーランド×スペイン戦（20日）は、ポーランドが前半、新鋭アンサク（スラスド・ウラクロウ）の好シュートで11—8とリードしたが、地元の声援をうけたスペインは後半開始と同時にラバカ（グラノラース）、ケスタ（アトレティーコ・マドリッド）の連続得点で1点差に追いこみ白熱。

しかし、先手をとりつづけたポーランドは終盤15—14から一気に加点、21—16でつきはなした。

結局ソビエト、ポーランドにサンセバスチァン市で行われた第1組のノルウェー、アイスランドの計4ケ国がこの段階でミュンヘン行きを決めたのである。

▽1・2位決定戦		
ソビエト	15—14	ノルウェー
▽3・4位決定戦		
アイスランド	21—19	ポーランド
▽5・6位決定戦		
スペイン	18—15	ブルガリア
▽7・8位決定戦		
スイス	22—11	オーストリア
▽9・10位決定戦		
フランス	16—11	ルクセンブルク
▽11・12位決定戦		
フィンランド	25—15	ポルトガル
▽13・14位決定戦		
オランダ	28—10	イタリア
▽15・16位決定戦		
ベルギー	31—1	イギリス

ソビエトら5ケ国勝つ

3月22日からは順位決定戦8試合（別表）が行われた。

当初は第5代表（5位）決定戦だけが行われるように聞いていたが来てみると1位から16位までを決めるとのことで力の接近した8カードはそれぞれ興味深いものであった。

試合への興味の一方、日本から持ちこんだカメラ、ビデオコーダーが両肩にずっしりと重く、しかも一人旅の不安に「はたして撮れるか」という心細さが加るのだから正直のところ「このような、つらい観戦」ははじめてでもあった。

熱狂のスペイン×ブルガリア

順位決定戦でいちばんの圧巻はオリンピックへの切符をかけたスペイン×ブルガリア戦（24日）。

会場のスポーツホールは五千の観衆で埋まり、ただでさえ情熱的な国民、騒々しいばかりの熱狂ぶりだった。

スペインとしては16ケ国を一堂に集めての大会を引きうけたうえは、どうしても勝ちたかったであろうし、オリンピックに出るか否かは今後の同国における〝バロンマーノ〟（ハンドボール）の位置にも響く。文字どおり総てがこの一戦にかけられていたのだ。

スペインは立ちあがりからとばし5—1と先制、その優位を持ちこみ、11—5で後半を迎えた。

後半に入るとブルガリアはクリストフ（セルノモレツ、178㎝）、ヨルダノフ（スポルティスト、183㎝）リポスクリェフ（同、179㎝）らがじわじわと得点を返し、守ってもラザロフ（ESKA・セプスネーム138㎝）に代ったGKゲオルギェフ（ソフィア・ロコモティブ、181㎝）の美技でスペインの加点を阻み、20分には14—14のタイスコアとなった。追う者の強み、ブルガリア有利かと思った瞬間、「スペインがミュンヘンに出場できるか

どうかはこの一勝にかかっています。皆さん、今まで以上の応援をお願いします」という放送が場内に流れた。日本では考えられぬ〃応援放送〃だ。さあ、たまらない。この呼びかけをキッカケに観衆は足を踏みならし笛を吹き太鼓を叩いての大声援、総立ちとなっての大合唱という興奮状態となった。選手もこれで勇気づけられたのか、ディフェンスの動きがよくなり、すばやい出足からのインターセプト、速攻などでチャンスをつかみエース・モレラ（バルセローナ）タウレ（同）が好シュートを放ち得点、16—14、16—15、17—15、18—15でついにブルガリアを押し切った。

終了と同時に役員、選手が観衆にかわるがわる胴あげされ、協会・選手としてファンが一丸となってかちとった勝利を喜ぶ歓声がいつまでもつづいた。余談になるが、これで今回の各地予選は日本（アジア）、アメリカ（アメリカ）、チュニジア（アフリカ）、スペインといずれも開催国が勝ったことになる。

興奮の場内と対照的に次の試合の出（で）を待つポーランド、アイスランドの各選手が極めて冷静にコートサイドに立つ姿が、なにか欧州的で胸にこみあげてくるものがあった。

悔れぬノルウェー

〃決勝〃のソビエト×ノルウェー（25日）戦は、本番ではともにメダルを狙う有力チームという前評判だった。

日本にとってこれまでソビエトは苦手のタイプ（日本は40—10、30—13、27—12で3戦3敗）、ノルウェーはやりやすい相手（日本は18—14、21—16で2連勝）であった。

ソビエトはマキシモフ、クリモフのほかセブチェンコ（MAI・モスクワ）GKセメノフ（同）ウサティ（チェスカ）どいったベテランが攻守の軸になっておりマキシモフ（26才）を除いてはいずれも30代。イリイン（MAI・モスクワ）、クリエフ（同）、チャシィコ（モスクワ大学）、GKイチェンコ（ザポ・ロジエ）といったイキのいい長身の若手も出ているが、金メダルを狙う主力はマキシモフらであろう。

ノルウェーは2年前の世界選手権で随所に若さをのぞかせた中心選手の個人技術がすっかり安定、悔りがたいチーム力となっている。アンクル（アリルド・オスロ）、ティルダル（レフスタド・ドラムメン）の両エースとI・ハンセシ（フレデンスボーグ）、レイナートセン（同）らの攻撃力はシャープ

チュニジアがアフリカ代表に

ミュンヘンオリンピック地域（大陸別）予選の悼尾を飾るアフリカ予選会は3月25日から30日までチュニジアのエル・メンザスポーツパレスに6ケ国が参加、リーグ戦で一つの代表権を争った。

連日めまぐるしく順位の変わる激戦となり、有力と目されたチュニジアが第2日アルジェリアに敗れる波乱もおきた。

第3日以降はチュニジア、エジプト、セネガルのつばぜり合いとなり、六千のファンを集めた最終日セネガルがエジプトに敗れまず後退、チュニジア×モロッコ戦でチュニジアが勝てばチュニジア、敗れればエジプトというケースになった。チュニジアはすばらしい斗志でモロッコを圧倒、アフリカ代表権を握った。このシリーズの得点王は26ゴールをあげたタグニ（カメルーン）。チュニジアではエース・ジェリリの攻撃力が目立った。

これでミュンヘンオリンピックに出場する全代表（16ケ国）が出揃い4月22日予選リーグの抽せんが行われた（2頁参照）。

アルジェリアの健斗光る

チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
チュニジア	25	14—10	11—11	21	セネガル
アルジェリア	20	7—7	13—12	19	モロッコ
エジプト	27	13—7	14—7	14	カメルーン
アルジェリア	17	9—8	8—8	16	チュニジア
セネガル	21	12—10	9—9	19	カメルーン
エジプト	22	8—6	14—7	13	モロッコ
チュニジア	18	8—9	10—4	13	エジプト
セネガル	21	9—17	12—6	17	アルジェリア
カメルーン	24	14—14	10—3	17	モロッコ
エジプト	19	7—9	12—10	19	アルジェリア（引き分け）
チュニジア	17	8—7	9—8	15	カメルーン
セネガル	16	9—7	7—8	15	モロッコ
カメルーン	19	7—7	12—10	17	アルジェリア
エジプト	24	13—9	11—8	17	セネガル
チュニジア	21	14—6	7—3	9	モロッコ

【順位】①チュニジア勝ち点8（4勝1敗）②エジプト7（3勝1分1敗）③セネガル6（3勝2敗）④アルジェリア5（2勝1分2敗）⑤カメルーン4（2勝3敗）⑥モロッコ0（5敗）

だ。

試合はソビエトが4―2、5―3と先行したが振り切れず、ノルウェーの大健斗だった。

後半に入っても一進一退の展開はくずれず接戦がつづいたが、結果的にはソビエトはマキシモフをもつのが強味、要所で強シュート巧シュート、7MTを決めて（この試合8得点）、食い下るノルウェーをねじふせた。マキシモフのプレーは大きなフェイントが特色であり、日本人からみれば超ロングシューターといえる。

2年前、20―19で我々が勝ったアイスランドは、メンバーがほとんど変わらず、ホルスタインソン（ハフナルヒョルドル）を切り札にシグスタイン（フラム・レイキャビク）、ジョンソン（ヴァルル）ヨンソン（ホーカル）、マグマッソン（ヴァイキンガー）らがポストプレーを多用。GKは33才のアイナルソン（ハフナルヒョルドル）が健在だがFPの防禦は甘い感じ

出場権を惜しくも逸した国の中ではやはりスイス、オーストリアフランスが他の国とのあいだに一線を引いているようだった。

個々の選手ではノッター、クノーリ（スイス）、ブルネ（フランス）、パッゼル（オーストリア）らが目についた。

クノーリは196cm。ブルネは192cm。パッゼルは195cm、ふだんは西ドイツのFA・ギョッピンゲン（今年度優勝）で活動しているという。

ルクセンブルグの2m選手シュンメルは出場せず、18才で197cmのカーペンが若さに委せたダイナミックな攻撃で話題となっていたようだ。

イギリスは5試合で33得点、168失点という弱体、イタリアも未だしだ。日本になじみ深いところではフランスのプティ（ステラ・サンモール）が頑張っていた。

上位国もさかんに偵察

ところで、世界の情勢としてチームのフォーメーションの中に、個人技術を多く活かし、個人プレーの重視を感じた。

その一つはフェイントである。フェイントといえば日本の専売特許であったが、現在では各国とも二、三人フェイントをかける選手がいる。

このフェイントも空中に浮き、ボールと体を左右に動かし、着地とともに抜く、日本と少し違ったフェイントである。

次にシュート。左右に変化してのシュートがめっきり増えた。これは長身の選手が多くなるにしたがいバックスのブラインドから強引にシュートする……にあると感じた。

いつもながら各国の戦力のさぐりあいもさかんである。

ヨーロッパといえば各国が国境を接しあい国際交流も多く、情報網が行き届いていると思うのだが上位チームのコーチ陣が二、三人組んで「敵状視察」。私と同じようにビデオコーダーを撮す一方、マイク片手にゲームの分析解説を吹きこんでいる。

ソビエトをのぞいては上位にとってそう手強い相手はいない、と思う今回の予選だったが、上位国にとって下位チームとの取りこぼしほど恐いものはない。真けんに警戒している姿は強く印象に残った。私もこの視察を無にしないよう今後の強化合宿で指導していきたいと思う。

なお、今回の見学にあたり現地でお世話願った池永氏（全日本・東一敏選手の親戚）、年度末社務多忙の折にもかかわらず理解を示していただいた大崎電気・渡辺和美社長に感謝するものです。

日韓の「地域連盟案」を採択
IHF、今夏の総会で

国際ハンドボール連盟（IHF）からこのほど日本協会へ伝えられた連絡によると、日本と韓国が準備している「地域連盟を認めていないIHF規約の改訂を求める」共同提案を、8月ニュウルンベルグ（西ドイツ）で開く第13回IHF総会の議題として採択することを明きらかにした。

この共同提案は、昨秋11月15日東京で行った「アジア各国代表者会議」の結果、アジア連盟（仮称）を設立するためにIHF規約の変更を求めることにしていたものである。（本誌39号参照）

日本協会は近く韓国協会と総会への打合せを行う予定。

ヨーロッパ5代表の主力選手

・数字は身長（cm）
・KはGK、FはFP
・〇印は一九七〇年の（フランス）世界選手権代表選手
（本誌調べ）

◇ソビエト

	選手	身長
K	〇セメノフ	183
	〇ヴィルソン	185
	〇イスチェンコ	190
F	イリイン	191
	チュラウリェフ	191
	〇セブチェンコ	176
	〇クリモフ	189
	〇マキシモフ	188
	クレフ	192
	レザノフ	196
	オガネソフ	186
	ウサティン	181
	ラグティン	186
	チャシィ	189
	クヤフスキー	184
	ルチェンコ	183

◇ノルウェー

	選手	身長
K	〇ヴィエ	192
	ソデルストリョーム	189
	オクステル	189
F	〇I・ハンセン	186
	〇レイナートセン	187
	〇ウルダル	178
	〇アンクレ	193
	〇カッペレン	193
	〇グラフ・ヴァン	180
	〇ベルセン	180
	T・ハンセン	186
	オスサー	185
	バエク	181
	〇ティルダル	188
	ヘグナ	182
	マグヌッセン	194

◇ポーランド

	選手	身長
K	〇スジムック	192
	ロスミアレク	180
	ボイザク	188
F	ノビンスキー	180
	〇スゾルク	180
	〇ククタ	189
	〇プニオシンスキー	180
	〇レク	185
	〇サワダ	180
	〇ディボル	174
	〇メルセル	197
	クリジェル	180
	〇ソコロウスキー	192
	アンサク	189
	ストロジク	185
	〇ピエカレク	180

◇アイスランド

	選手	身長
K	〇アイナルソン	186
	〇フィンボガソン	180
	ベネディクトソン	179
F	スクラソン	178
	〇シモナルソン	182
	〇ヨンソン	178
	ブリョンダル	189
	〇ブョルグヴィンスン	178
	〇シグスタイン	180
	〇H・ジョンソン	191
	ギュンナルソン	186
	〇ホルスタインソン	185
	アセルソン	190
	グォムンドソン	178
	オグムンドソン	187
	〇マグヌッソン	187

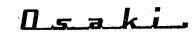
◇スペイン

	選手	身長
K	グェルレオ	・
	ベルラモン	187
	F・ヴェリラ	180
F	モレラ	180
	アンドリュー	・
	ヴィラマリン	182
	タウレ	177
	ガルシャ・ケスタ	180
	ロシェル	173
	ラバカ	181
	バルセル	・
	ド・アンドレ	174
	メディナ	183
	イガルテュア	185
	オルテガ	・
	カスカラナ	・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

海外トピックス

杉山　茂

東ドイツ、安定の攻守
〜カルパティア杯〜

第13回カルパティア・カップは3月4日から9日までブカレストに5ケ国6チームが参加して行われた。

オリンピックの金メダル候補が揃った大会だけに多くの注目をあびたが東ドイツが安定した試合ぶりで4勝（1分）をあげ優勝したシーズン前半不振のスウェーデン（昨秋来日）が持ちなおしてきている。

この大会は昨年11月に第12回大会を開いたばかり（本誌第93号参照、ユーゴ優勝）だが、ミュンヘンを控えて、このようなたてつづけの開催になったようだ。

ユーゴ　23—12　ルーマニアB
チェコ　記録不明　スウェーデン
ルーマニア　24—17　ルーマニアB
スウェーデン　17—17　東ドイツ
ユーゴ　19—19　チェコ
東ドイツ　28—10　ルーマニアB
スウェーデン　14—13　ユーゴ
ルーマニア　12—9　チェコ
スウェーデン　14—10　ルーマニアB
ユーゴ　17—15　ルーマニア
東ドイツ　17—16　チェコ
東ドイツ　22—19　ユーゴ
ルーマニア　12—11　スウェーデン
チェコ　20—15　ルーマニアB
東ドイツ　13—12　ルーマニア

【順位】①東ドイツ4勝1分②ルーマニア3勝2敗③ユーゴ・スウェーデン・チェコ2勝2敗1分⑥ルーマニアB5敗

チェコ、地元で優勝
〜チェコ国際〜

チェコ国際トーナメントは3月31日から3日間プラハに4ケ国が参加して行われ、地元チェコが3戦全勝で優勝した。

チェコ　24—19　デンマーク
ユーゴ　18—15　西ドイツ
ユーゴ　21—17　デンマーク
チェコ　18—17　西ドイツ
チェコ　19—17　ユーゴ
デンマーク　18—14　西ドイツ

【順位】①チェコ②ユーゴ③デンマーク④西ドイツ

キエフ、3連勝を目前
〜女子ヨーロッパ杯〜

第11回女子ヨーロッパカップトーナメントは終盤戦に入り4月上旬の準決勝でスパルタク・キエフ（ソビエト）とSC・ライプチヒ（東ドイツの）決勝進出が決まった。

キエフはチエミスト・バコーニィ（ハンガリー）、ライプチヒはブカレスト大学（ルーマニア）と顔を合せともに第1戦を落とす苦戦だった。

決勝戦は4月末チェコで行われる予定だがキエフが勝てば史上初の3連勝、ソビエト代表としては5連勝を飾ることになり、ライプチヒが勝てば第6回（一九六六）以来2度目の優勝となる。

▽準決勝第1戦
チエミスト バカオニィ（ハンガリー）　15—14　スパルタク キエフ（ソビエト）
ブカレスト大学（ルーマニア）　16—15　SC・ライプチヒ（東ドイツ）

▽同第2戦
スパルタク キエフ　11—9　チエミスト バカオニィ
SC・ライプチヒ　16—8　ブカレスト大学

（注）両カードとも1勝1敗のため2試合の合計得点で勝負が決められた。

世界軍隊選手権を計画

国際軍隊スポーツ連盟（CISM）では、このほど各国の軍隊ハンドボールチームによる世界選手権の開催を計画、国際ハンドボール連盟（IHF）に対し規約の変更を求め、同選手権実施の場合、IHFの公認する大会となるよう働きかけることを明きらかにした。

ヨーロッパでは軍隊選手権が各スポーツともなかなか盛んだが、世界選手権になると球技ではバスケットボールがある程度だ。

IHFの〝反応〟はいまのところ伝えられていない。

仏選手権大詰へ　昨秋10月から長期リーグ戦をつづけていたフランス選手権は大詰めを迎えこのほど女子の決勝戦が行われ、ペサカイ大学がASU・リヨンを12—6で破り優勝を飾った。

男子は決勝トーナメントにおなじみのステラのほかRP・ストラスボーグ、メッツ、パリ大学の4強が進出を決めた。決勝は6月上旬の予定。

世界中年大会は別種目　国際シニアスポーツ協会は6月ロスアンゼルスで第3回世界中年（35才以上の男女）スポーツ選手権を行うと発表、日本協会でもこの大会に関心を示していたがこのほど日本体育協会へ届いた要綱によるとこの大会で実施されるハンドボールは個人種目のいわゆるウォール（Wall）ハンドボールであることが判った。

読者投書欄　明日への提言

残念だったラフプレー 大阪の日独戦

4月8日大阪で行われたダンケルセンと全日本の試合は、全日本の成長いちじるしいプレーが優り快勝、大いに気をよくしたのだが心残りに思ったのは両軍選手がかなりエキサイトして乱暴なゲームとなったことだ。

翌日の新聞でダンケルセン側が「日本の審判員は不公平だ」といっているのをみていっそう残念で日独交流に汚点をしるしたのは問題だと思う。

スタンドから見ていた感じではどうもその日の両審判員が反則をとるのを遠慮していたようで言葉もあまり通じないみたいであった反則への判定が甘くては荒っぽい試合になるのは当然なことで、それが昂じてダンケルセンの感情的な発言になったのではないか。

また、これも新聞で読んだことだが全日本のコーチが「外国ではこの程度のラフプレーはしじゅう」と云っていた。ハンドボール愛好者の大半は高校生なのだから不隠当な発言や誤解を招く意見は述べないほうがよいと思う。時を同じくしてオーストラリアのラグビーチーム（コルツ）の粗暴な試合ぶりが問題となっていただけにスポーツというものがラフなものという印象を一般にうえつけないためにもプレイヤーはフェアをつねに心がけて欲しい。

それと審判技術のいっそうのレベルアップを望むものだ【神戸市 斎藤哲哉・予備校生】

登録料に段階制を

日本協会は登録料の値上げを行った。私の周囲ではこれによって一般チームの登録は減るだろうから日本協会の台所はそうプラスにならないのではないか、という声が強い。日本協会役員が、底辺の実情を知らず今回の増額を決めたのだとしたら問題である。

ハンドボールを愛する者として日本協会がオリンピック一辺倒となり頂点偏重施策となることに私は特に不満はない。高い所での活躍がそのスポーツを発展させるからだ。

しかし登録料などというものは充分一般の状況をリサーチして決めて欲しい。現行の登録料制度は日本協会の破たんになれこそすれ繁栄にはつながらない。

少くとも一般はA、B、Cランクぐらいに段階をつけるべきだ。

【東京・青山　誠・28才】

何故出ない全日本…NHK杯

今年のNHK杯に男子ナショナルチームは出ないそうである。去年はともかく今年こそナショナルは出るべきではなかったのか。

オリンピック代表あるいは候補はおそらく自分の所属チームから登場するのだろうが、NHK杯からオリンピックまで二ケ月しか残されていない。

オリンピックイヤーでもない年には出場規制などを布きながら大事な年に逆の方向をとるとはどんな理由があるのだろう。

去年の大会で勝敗的な興味がなかったために〝改善〟したのかも知れないが、今年はどんなに差がついてもファンは怒らなかったハズ。

こんなところにも、日本協会の長期的な展望の欠如を感じるのである。また、NHK杯の大会性格をこの際はっきり示すべきではなかろうか。

【東京・植田修司・会社員】

読者による投書欄を復活いたしました。日本ハンドボール界への建設的な意見をどしどしお寄せ下さい。字数は500字以内。用紙自由。匿名を認めますが原稿の末尾には必ず住所、氏名、年令または職業をお書き下さい。

全日本〝姉〟の貫録示す

善戦した実業団選抜（訪韓チーム）

昨冬オランダで開かれた第4回世界女子選手権出場の「全日本女子報告会」と、5月訪韓を控えた「全日本女子実業団選抜」の壮行会を兼ねた対抗戦が4月15日午後3時50分から名古屋・愛知県体育館で行われ、姉さん格の全日本女子が後半地力を示して貫録勝ちした。（観衆千二百）

全日本女子 11（5—4、6—2）6 全日本実業団女子

	選手	所属	得
【実業団選抜】 GK	長岡	東京重機	0
	佐藤玲	ブラザー	0
FP	蓮見二	ビクター	1
	金村	ブラザー	0
	八重樫	ビクター	0
	広森	田村紡	3
	村中	大洋デ	0
	蔵田	大洋デ	1
	佐藤あ	大崎電気	0
	辻	田村紡	0
	藤浪	ブラザー	0
	村上	東京重機	1
			6 （1） 7MT
【全日本】 GK	小原	大洋デ	0
	北岡	愛知教員	0
FP	垂水	大洋デ	5
	米	大洋デ	1
	牧野	東京重機	0
	寺尾	大崎電気	0
	三毛	田村紡	0
	古佐原	東京重機	2
	島田	大洋デ	3
	滝口	東京重機	0
			11 （2）

（審・川島、角）

▽交代【実】GK和田（大崎電気）得0

○……全日本は久しぶりにチームを組んだせいか立ちあがり動きがチグハグ、そのスキを実業団選抜はついて5、6分広森が連続ゴールし2—0とリードした。

全日本は11分7MTで1点を返したが、実業団選抜もすぐ7MTを取り返し優位を保った。ここで実業団選抜がもう一押しすれば全日本もかなり慌てたのだろうがチャンスを活かし切れず、逆に16分島田、21分7MTで3—3。実業団選抜は24分蔵田のゲットで再びリードを奪ったものの、全日本は残り1分間に島田のロングシュートで同点、さらにタイムアップ寸前、こぼれ球を拾っての速攻から古佐原が決め逆転した。

○……いったん優位に立つと全日本は巧い。後半反撃を狙う相手をたくみに制しながら、スムースになったローリングに鋭い走りをおりこんで6分垂水のゴールから12分までに連続4得点、9—4とはなした。

実業団選抜も粘り蓮見、村上のゲットで追いこみ、守りも立ちなおったのだが、全日本は20分すぎ古佐原、垂水がゴールをあげ逃げ切った。

全日本が要所を逃さぬ攻めっぷりを見せたのはさすがで、実業団選抜は善戦にとどまった。

（池田鉄哉・全日本実連理事）

大阪体大、甲子園短大が連覇

西日本学生

学生界の新シーズン開幕を飾る第12回（女子第3回）西日本学生選手権は4月18日から22日まで京都・西京極体育館などに男子31、女子6校が参加して行われ、男子は大阪体大が2連勝、女子は甲子園学院短大の3連勝におわった。

▽男子予選トーナメント1回戦

大阪工大（関西） 29—13 天理（関西）
南山（東海） 14—12 京都教大（関西）
大阪大（関西） 28—22 広島商大（中四国）
京都産大（関西） 22—8 神戸大（関西）
立命館（関西） 不戦勝 関西外語大（関西）
大阪歯大（関西） 24—11 滋賀大（東海）
桃山学院（関西） 19—8 大阪薬科大（関西）
名城（東海） 16—9 関大（関西）
大阪府大（関西） 13—12 甲南（関西）
近畿大（関西） 23—15 岐阜大（東海）
愛知教大（東海） 25—9 大阪外語大（関西）
京大（関西） 19—8 香川大（中四国）
松山商大（中四国） 22—2 追手門学院（関西）
同志社（関西） 13—9 中京（東海）
大阪経大（関西） 19—11 竜谷（関西）

▽同2回戦

大阪体大（関西） 22—11 立命館
大阪工大 11—7 南山
京都産大 17—11 大阪大
桃山学院 31—13 大阪歯大
名城 14—5 大阪府大
近畿大 22—17 愛知教大
京大 14—11 松山商大
同志社 9—8 大阪経大

▽同3回戦

大阪体大 26—8 大阪工大
京都産大 17—6 桃山学院
名城 18—7 近畿大
同志社 20—15 京大

勝者4校が決勝リーグへ進出

▽同決勝リーグ

大阪体大 15（8—1、7—6）7 京都産大
同志社 17（8—6、9—6）12 名城
大阪体大 14（8—4、6—3）7 名城
同志社 10（9—4、1—5）9 京都産大
京都産大 17（5—2、12—5）7 名城
大阪体大 18（7—3、11—3）6 同志社

【順位】①大阪体大3戦全勝②同志社2勝1敗③京都産大1勝2敗④名城3敗

▽女子予選リーグA組

中京（東海） 10—1 大阪薬大（関西）
甲子園（関西） 11—5 中京
甲子園 25—2 大阪薬大

▽同B組

愛知教大（東海） 7—6 大阪教大（関西）
大阪体大（関西） 12—4 愛知教大
大阪体大 14—8 大阪教大

▽同5・6位決定戦

大阪教大 11—2 大阪薬大

▽同3・4位決定戦

中京 12（5—3、7—2）5 愛知教大

▽同決勝

甲子園 11（3—1、8—1）2 大阪体大

NHK杯女子実連代表決まる

NHK杯（6月・大阪）に女子実業団代表として出場するチームの選考試合は4月29、30日名古屋ブラザー工業体育館に6チームが参加して行われ田村紡（三重）と日本ビクター（茨城）が制勝、推せんの大洋デパート（熊本）とともに本大会への出場を決めた。

▽代表決定戦

田村紡（三重） 9（7—5、2—3）8 ブラザー工業（愛知）
日本ビクター（茨城） 12（5—5、7—4）9 東京重機（東京）

恒例になった熊本の大合宿（高校女子）

□……3月末になると南国・熊本の桜はすでに満開だ。それを待っていたかのように西から東から高校女子チームが張り切った顔で乗りこんでくる。

「高校女子総合々宿」。5年前県内のレベルアップを目的に熊本協会が開いたものだが、話を聞きつけて県外からもチームが集るようになり、今年は有磯（富山）、津女子（三重）、神戸商（兵庫）、沖縄選抜など11県19チームが3月26日から4月3日までの9日間入れ替り立ち替りに現れた。

□……この合宿がこうまで人気があるのは、短期間でタイプのちがったチームと存分に交流できること、女王・大洋デパートが胸を借してくれることのようだ。

熊本合宿交流試合成績
（本誌調べ・試合数順）

	試	勝	分	負
熊本市立（熊本）	19	15	2	2
有磯（富山）	19	13	1	5
津女子（三重）	19	11	2	6
神戸商（兵庫）	18	7	0	11
高水（山口）	18	5	3	10
熊本女商（熊本）	17	9	2	6
徳山（山口）	16	8	3	5
島原農（長崎）	15	5	3	7
佐世保商（長崎）	14	11	0	3
九州女学院（熊本）	13	0	0	13
神埼農（佐賀）	12	4	0	8
小林商（宮崎）	11	5	0	6
筑紫女学園（福岡）	9	4	1	4
沖縄選抜	8	1	1	6
財部（鹿児島）	6	5	0	1
鹿本商工（熊本）	6	2	0	4
尚絅（熊本）	6	1	0	5
国分実業（鹿児島）	5	2	0	3
加治木（鹿児島）	5	1	0	4

（大洋デパート，鹿児島一般選抜との対戦は含まない）

冬季練習でみっちり体力をたくわえ、さて実戦経験をと思っても県内だけでは変化がない。熊本に来ればあらゆるカラーのチームと交流できる。しかも一日四試合までOKというのだからスタミナ増強にもつながるのだ。

神戸商のように毎年アルバイトで「熊本行」の費用を溜め、この合宿参加を恒例にしているところさえある。

□……大洋デパートとの〝対戦〟は魅力だ。世界選手権に7人を送りこむ大チーム。高校チームではめったに顔合せできぬ相手だが、この合宿に参加すれば気軽に試合を引き受けてくれる。

大洋デパートの気力と技術にジカに触れられるのはなににも優る〝教科書〟だ、と各チームの監督は口を揃える。

□……いくつかの好意もこの合宿を支える大きな力である。

なかでもグランドはもとより食事、宿泊など全面的な協力を示す九州女学院（熊本市清水町）の理解は見逃せない。

熊本協会関係者も連日グランドに姿を見せ世話をやいた。試合スケジュールを調整するだけでもう汗だくになる。高校同士の試合は118試合。このほか大洋デパートと10試合、特別参加の鹿児島選抜（一般女子）と4試合の対戦があり、ピークの3月28日は実に29試合を消化した。国体をしのぐ過密さである。

□……参加選手の目標は盛夏のインター・ハイ。去年は、この合宿に顔をみせた7県（14校）のうち6県が晴れの県代表に輝やいている。今年の成績いかんでは、春の熊本詣ではますます盛んになりそうだ。

グランド以外にもいくつかの思い出話や友情が芽ばえた。

4月1日にはめずらしく雪が降り沖縄の選手は大喜び、というハプニングもあった。

「桜の花が咲くたびにこの合宿のことを思い出すでしょう」——帰途につく選手たちの表情は来る時よりもいっそう晴れやかで楽しげだった。

各地の記録

小禄、女子で5連勝

▼第7回全沖縄高校新人大会（3月・浦添高）

▽男子準々決勝
那覇 19—2 北農
知念 16—11 中部工
豊見城 11—10 真和志
コザ 15—4 浦添

▽同準決勝
那覇 10—5 豊見城
知念 14—5 コザ

▽同決勝
那覇 9（4—3、5—3）6 知念

▽女子準々決勝
首里 9—8 糸満
小禄 6—4 浦添
興南 12—5 知念
真和志 6—4 沖縄

▽同準決勝
興南 7—2 真和志
小禄 19—3 首里

▽同決勝
小禄 10（5—3、5—5）8 興南

名城ク、得失点差で優勝

▼第13回愛知クラブ対抗リーグ（3月・名古屋市体育館）＝男子

▽1部
愛教ク 23—12 大江ク
愛教ク 22—8 東山ク
大江ク 31—11 東海ク
桜丘会 21—18 東山ク
名城グ 24—13 愛教ク
桜丘会 25—20 大江ク
東海ク 22—17 東山ク
名城ク 27—17 東山ク

桜丘会 32―15 愛教ク
東海ク 13―8 名城ク
名城ク 18―12 桜丘会
東山ク 26―22 大江ク
桜丘会 19―14 東海ク
名城ク 24―16 大江ク
東海ク 16―12 愛教ク
【順位】①名城ク4勝1敗（得失点差30）②桜丘会4勝1敗（24）③東海ク3勝2敗④愛教ク2勝3敗⑤大江ク1勝4敗（得失点差マイナス8）⑥東山ク1勝4敗（マイナス26）

▽2部9位決定戦
中川ク 20（分）20 愛商ク

▽同7位決定戦
桜丘会B 27―19 一宮ク

▽同5位決定戦
松蔭ク 33―18 佐織ク

▽同3位決定戦
名大ク 24―20 東海クB

▽同2部優勝決定戦
愛工ク 23―10 南山ク

▽1・2部入替え戦
東山ク（1部） 14―13 愛工ク（2部）

▽3部順位①東杏会4戦全勝②尾北ク3勝1敗③一宮工ク2勝2敗④向陽ク1勝3敗⑤若松ク5敗（2部の9、10位と3部1、2位は自動的に入れ替る）

男女とも添上強し

▼奈良県高校春季大会（4月・添上高）

▽男子準々決勝
添上 24―4 桜井商
奈良 15―8 奈良高専
東大寺 18―6 郡山
十津川 9―8 畝傍

▽同準決勝
添上 24―14 十津川
奈良 11―5 東大寺

▽同決勝
添上 17（8―1、9―1）2 奈良

▽女子1回戦（1試合）
生駒 4―3 桜井商

▽同準決勝
添上 10―2 十津川
生駒 8―2 郡山

▽同決勝
添上 7（3―2、4―2）4 生駒

三菱レイヨン、逆転勝ち

▼第14回広島県知事杯争奪一般男子トーナメント（4月・大竹市）

▽準々決勝
日本鋼管福山 16―6 修道ク
全広商大 20―12 石播呉造船
三菱レ大竹 24―11 広島工大
日新製鋼呉 23―11 広島教職員

▽準決勝
日本鋼管福山 19―8 全広商大
三菱レ大竹 17―8 日新製鋼呉

▽決勝
三菱レイヨン大竹 21（6―8、15―2）17 日本鋼管福山

山陽女、快調のスタート

▼広島県高校トーナメント（4月広高）

▽男子3回戦（2試合）
広 26―4 呉商
修道 17―11 山陽

▽同準決勝
呉工 11―7 広
修道 13―11 修道

▽同決勝
呉工 13（4―6、9―5）11 修道

▽女子2回戦（2試合）
進徳 10―1 白木
呉商 4（分）4 豊栄
抽せんで呉商の勝ち

▽同準決勝
山陽女 15―1 呉商
第一女商 11―2 進徳

▽同決勝
山陽女 11（3―2、8―1）3 広島第一女商

▼第9回東京都選手権主要記録

▽クラブ男子決勝
神代ク 21（11―10、7―8、0―0、3―0）18 荏原ク

▽同女子決勝
美和ク 13（6―2、7―3）5 小平OG

▽一般女子決勝
東京重機 11（6―4、5―5）9 日本ビクター
東京重機工業は2連勝

▽同男子準決勝
東京教員ク 19―18 中央大
日体大 18―17 全日体大

▽同決勝
東京教員ク 21（13―9、8―7）16 日体大
東京教員クは初優勝

▼神奈川県室内選手権・続報（2月 横浜文化体育館ほか）

▽高校男子準々決勝
大和 12―4 東
一商 17―9 川和
立野 7―6 少年工科
桜ヶ丘 11―5 川崎工

▽同準決勝
一商 14―13 大和
桜ヶ丘 13―9 文野

▽同3位決定戦
立野 10―7 大和

▽同決勝
一商 14―9 桜ヶ丘

▽同女子準々決勝
日野 10―7 京浜横浜
上溝 10―7 南
東 10―2 生田
市川崎 5―4 高浜

▽同準決勝
日野 12―8 上溝
東 7―2 市川崎

▽同3位決定戦
上溝 11―3 市川崎

▽同決勝
日野 6―4 東

山梨事務局変わる 山梨県協会の事務局所在地がこのほど変更された。
山梨県西八代郡市川大門町八乙女一七三三・県立市川高校気付

編集後記

○…注目のオリンピック組み合せ（予選リーグ）。日本としては願ってもない相手が並んだようです。対照的に5月のヨーロッパ遠征が相手国の受け入れ態勢が整わずお流れになったのはかえすがえすも惜しい気がします。

○…晴れの代表決定も間近かにせまってきました。
ふるいにかけられて最後の関門にさしかかった18選手。できることなら全員を聖火のもとに送りたい、という気持ちは編集子ばかりではないでしょう。さっぱりとした選衡を期待したいものです。

○…投書欄を「明日への提言」の名で復活しました。第17号（39年6月）以来8年ぶりです。
編集部としては全ページが「投書欄」である、という考えを進めて来たのですが、やはり窓口があった方が投げこみやすいとする御意見を聞くことにしました。この機会にさらに投稿が積極的となるよう待望します。

○…創刊以来初のカラー表紙。大阪の光島磯雄氏に〝特写〟願った作品です。限られた編集部予算では、毎回豪華版はできませんが、内容的にもなんとか見ても面白い雑誌への努力をつづけたいと考えています。
（S&F）

'72

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第九十七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十七年四月二十五日印刷
昭和四十七年五月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三二一一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価 二百円 (年間購読料千八百円)